む。

水なるかな水、シリヤに夏の旅して「活ける水」の味を知る。烈しき日、乾燥せる空氣、日を照りかへして白く晃めく岩の山、見るだに咽喉のいらく土の家、見るもの盡く唯渇きに渇きて、旅人の氣も遠く目も眩まんとする時、こに活ける水の泉あり、滾々として岩間より湧き出づ。嬉しさは言に盡し難し。水なるかな、水ありて綠あり、水は咽を濕し、綠は眼を潤す。水ありて、人あり、獸あり、村をなす。水なるかな、ヨハネが生命の河の水を夢み、熱砂に育ちしマホメットの天國が四時清水流れ果樹

實を結ぶ處なるも、宜なるかな。自然の乳房に不盡の乳を滿たせし者に永遠に光榮あれよ。

エニンの夕

ドタンより丘を越へてカバチエーに到る。バレスタイン第一の橄欖林あり。皆古木。何千株なるを知らず。橄欖の實は九月に熟す。生食し、鹽藏し、オリーヴ油を製し、また石鹼の原料となる。

これより始終谷を下り、日沒櫻欄生ふるエニンに到り、

獨逸人のホテルに投ず。今日は終日サマリヤの山を行けるなり。行程はづかに七里餘。

エニンは昔のエンガンニム、海拔約六百五十呎、人口二千左右の小邑、サマリヤの山盡き下ガリラヤの平原起る所の境にあり。ホテルの窓より眺むれば、展望幾里、紫嵐を凝すカルメル山脈の上、金を流せる入日の空を點破して飛鳥遙にナザレの方を指す。

明星の夕はやがて月の夜となりぬ。ホテルの下に泉あり。清冽の水滾々と湧き、小川をなして流る。甕の婦人來り、牧夫來り、牛、羊、驢、馬、駱駝、首さしのべて月下に飲む。

再び稱へむ、水なるかな、水なるかな。

エズレルの平原

六日。今日はナザレに着く日なり。朝六時欣々として馬に上る。漸く馴れて馬上も比較的樂になりぬ。

エルサレムよりサマリヤを經て一路エニンに到る迄、常に山上、または峽谷を過ぎて來り、エニンより一歩北すれば忽ち下ガリラヤの野、バレスタイン第一のエズレル

平原、またの名エスドレロン平原に下りぬ。エニンを出で丶三十分ならず、行手の山の上分明に白き邑を見る。あれは何と云ふ邑ぞ。あれこそナザレに候、と案内者が答ふる言葉の下より吾心は雀の如く躍りぬ。あゝあれがナザレか。父母に伴はれてエルサレムよりの歸途、基督は如何に其なつかしき、つれなき程猶なつかしき其ふるさとをば眺め玉ひけむ。おゝあれがナザレか、近いかなナザレ。否、近く見へても、あれでも十八九哩は候、と案内者は制す。此大平原は、北はナザレ一帶上ガリラヤの連山、南はサ

マリヤの連山、東はキルボア山小ヘルモン山、西はカルメル山脈に圍繞されたるほゞ三角形の盆地にて、南北の最長約七里、東西の最長十一二里もあらん。地中海面より低きこと二百五十呎、乾ける湖の如く、一面麥熟れて黄金の氈を敷く。バレスタインに來りて今日初めて平野を見、黑土の土らしき土を見る。麥は畝なしのばら蒔き、肥料を施さずしてよく出來たり。地味の豊饒思ふべし。春は野の花夥しく咲くと聞く。今はツユ葵、矢車、野しゆん菊、野人參の類のみ。當面は新約、三方は舊約の古跡に包まれたる此平原はお

のづから是れ古今の戰場、十字軍がサラヂンの爲に大敗をとりたるも此處なりき。

古跡より古跡

露の朝日をあたら馬蹄に散らしつゝ、やがてギルボア山に到る。是れサウルヨナタンのペリシテ人と戰ふて討死せし處、多恨のダビデが歌ふて「ギルボアの山よ、願はくは汝の上に雨露降ることあらざれ、亦供物の田園もあらざれ、其は彼處に勇士の干棄てらるればなり」と哭せし山

也。昔は樹木ありしと云ふも、今は赭禿の山海拔千六七百尺に過ぎず。此山の夷して平原に下る所はエズレルの跡也。曾てイスラエルの王アハブが隣の民の葡萄園を貪り、后イゼベル夫の爲に謀つて其民を殺して葡萄園を奪ひ、其報としてイゼベルは後王宮の窓より投落され、犬其肉を食ひしと傳へらるゝ所。今は土小屋七八立てるのみ。ほとりにふるき酒槽の跡あり。

エズレルの跡を見て山を北へ下れば、平原の餘波はギルボア小ヘルモン兩山の間を東へ走りて、ヨルダンの谷に到る。ギルボアの北麓には、ギデオンがメデア人を擊ち

し時、水を飲せてイスラエルの勇士をすぐりし泉の跡あり と、案内者は遙に山下の一所を指しぬ。やがて鐵道線路を横ぎる。此はダマスコよりカルメル山下のハイファ港へ通ふもの、エスドレロン平原を東西に横斷す。馬は傾斜をのぼりて小ヘルモン山南のシユヂムの跡に到る。舊約にモレの山とあるは此小ヘルモンなるべしと云ふ。高さはギルボアと伯仲の間なり。シユヂムはギルボアのサウルに對してペリシテ人の陣せし所、双方の間は小銃の戰も出來可き程に近く思はる。此處はまた預言者エリシヤが敬虔なる婦人の歡待を受け、後其子を死より復活せしめしと傳ふる所。今は夥しく茂れる覇王樹に圍繞されし十戸足らずの寒村なり。此處に三人抱程の素晴しき無花果の大木三本あり。三頭の馬を其一本に繋ぎ、余等三人は他の一本の下に毛布を敷いて座し、晝食午眠して午の前後四時間を此無花果樹下に費しぬ。小指の頭程の青き果ヒシと生れるを、小鳥は上よりつゝき、何處も變らぬ村の小供等下よりタゝき落して食ふ。

ナザレへ

午後二時無花果樹下を出でて再び馬に上り、小ヘルモン山の麓を北へ越へてナザレを指す。小ヘルモンの北麓、麥の穗末に平たき屋根の七八つあらはれたる孤村は、基督の寡婦の子を蘇らし玉ひしと云ふナインの村なり。頭圓くして形優美なるタボルの山も東に近く見ゆ。今日過ぐる所は、すべて舊約の士師記、列王紀略上下、サムエル書上下等に關する名所舊蹟に滿ちたる地なり。畑中の一堆邱に土造の穀物納屋の立ちたるを聖書の畫見る心地にをかしと見つゝ、やがてナザレの山麓に到る。石だらけの山坂路、電光形に上りて行く。右手に險崖矗

立せる所を陷擠山と呼び、ナザレ人等が基督を擠さんとせし所と傳ふ。やゝ去ばし上りて山上の垣らなる道となり、西することしばらくにして、山上の凹みに巢くへる白き家と綠と錯綜せるナザレの邑顯はれ出づ。

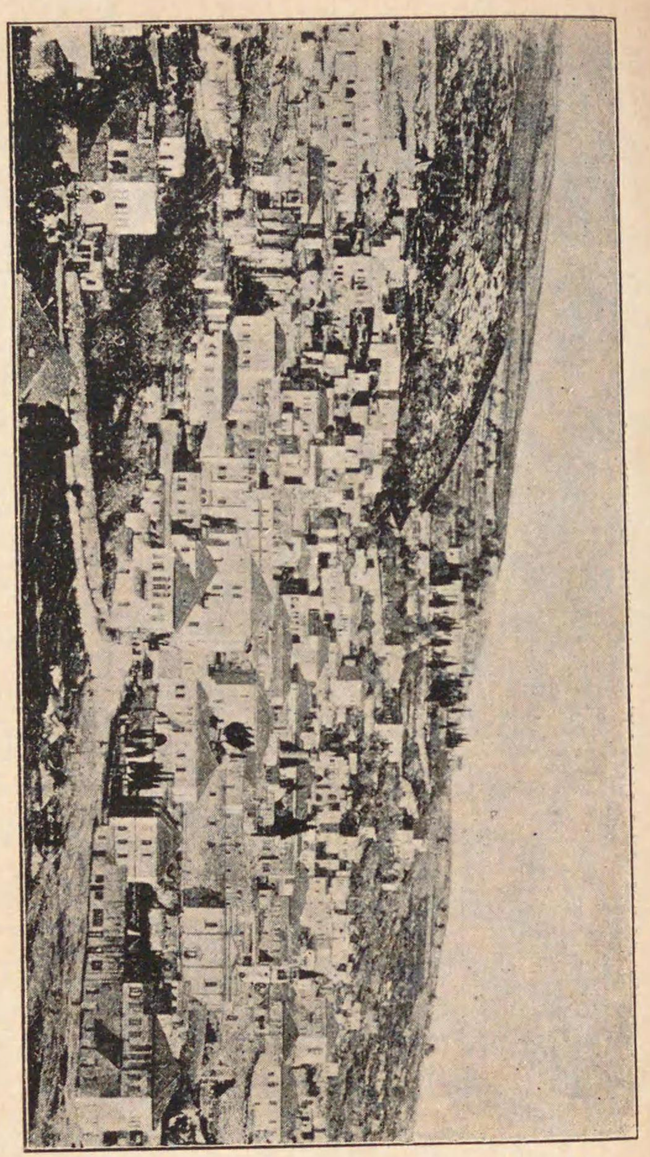
午后四時過ぎ井クトリア、ホテルの前に馬を下る。今日の行程七里。エルサレムよりナザレまで約二十七里。急げば二日路。

詩的ガリラヤ

月のナザレ

六月六日、日の少しく傾く頃、ナザレに着きて、非クトリア、ホテルに行李を卸す。此はシリア人の經營する宿にて、主人はクリスチアンなり。

露臺より眺むるに、山の上の云はゞ盆の窪の如き所に邑は取つきて南に向ひ、寺院、孤兒院、尼寺、病院、學校、



ヒ　ザ　ナ　の　今

順禮宿など白き建物の一高一低、サイプレス、無花果、橄欖などの綠と錯綜したる、見るに美くし。目下の人口は內外人を合せて一萬餘なるべし。

眺むる程に日影は消へて、不圖山の端に團々たる一面黃銅の盆を見出でぬ。月―とも云はず何時の間にか出でゝ、ナザレの山の上にあり。指を折れば印度洋に見しよりまさに一ケ月、今宵は十五の滿月なり。門出の時、父の送別の詩に「定知聖神降誕地、到日應見鏡月圓」とありしは、偶然にも詞の上の照應を見るに及びぬ。

日は光を曳いて去り、あとくらみ行く夜の空に月は次第

に照り出で、水の如き光ナザレの邑を浸す。逸興禁じ難し。出でて巷を月に歩す。家に蔭あり、黒き蔭の中より頭包める婦人いそぎ來る。若くは御名をマリヤとは申さずや。あゝ彼月白き廣場に影を乱して遊ぶ童等、やよヤコブよ卿の兄は何處に在りや。聞け、犬吠ふ。今宵も彼變物が山に祈りに行くなるべし。あゝナザレよ。ナザレの月よ。

君が住みしナザレの里を尋ね來て
昔ながらの月を見しかな
君が見しナザレの月を今宵しも

見れは君のみ見る心地して
神人を育てし地

七日。馬士イブラヒム君は馬を牽いて今日南に歸る。余は朝涼しき内にと、ジャルルック君を促して、ナザレの上の山にのぼる。

海拔約千五百尺の山の上の邑、家は層をなし、鋪石した る巷路は坂をなす。最高く一廓を構へたる英人設備の孤女院を過ぎて、山の頂ネビ、サインにのぼる。

廣濶たる眺よ。南は昨經來りしエスドレロンの平原、麥一面に黄ばみて、山々の麓に及ぶ。平原盡くる所、南に重疊たるはサマリヤの連山、其平原に下る所に一握の白きものは一昨の夜泊せしエニンの村なり。エルサレムは遙かに山のあなたにあり。西はエリヤに名高きカルメルの山脈、其北に盡くる所ほのかに蒼きは地中海の己を顯はすなり。東はギルボア、小ヘルモン、タボル諸山を見越してヨルダンの向ふの山を望む。ふり回りて北を見よ。あゝあれこそヘルモンの山よ。上ガリラヤの山谷重疊して波濤の如きあなた、東北の隅に巍然として海拔九千尺、

淺碧なる山の色、四時融けずと云ふ白雪の其頂に斑々たるを見よ。彼雪の如く輝やける衣を彼山に着し人は、此山の上より曾て彼雪を望みしなり。「ナザレより何のよきもの出でむや」とは愚なる人の子よ。彼雪の山は何をも語らざりしか。舊約史の活舞臺なる斯エズレル平原と四圍の山とは何ものをも語らざりしか。南の天、山のあなたのエルサレムは其心を躍らしめざりしか。天近くして平地を見下ろす山の上、ナザレはまさに神人を育つるに恰好の地なりしを知らずや。

野花の季節は過ぎたれど、頂上は色々の草花咲きて、朝

日の露未だ乾かず。小さき山龜の這ひありくは珍らし。

ナザレの古跡

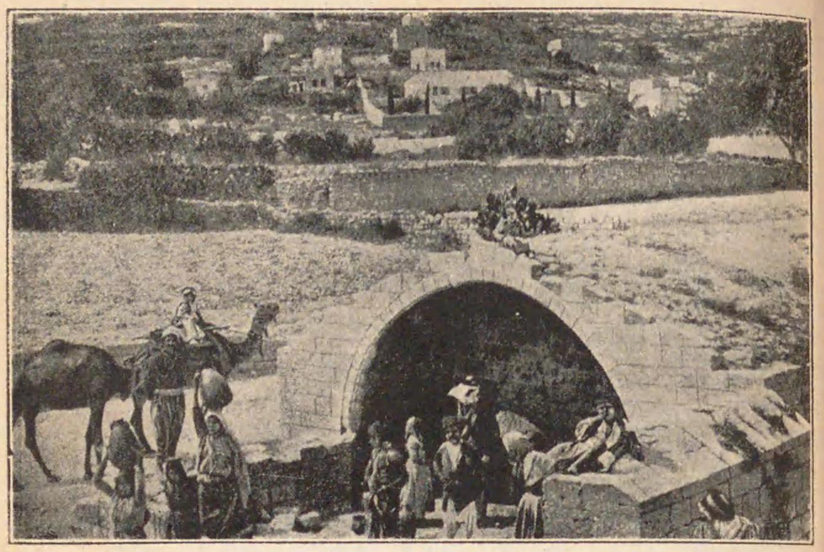
山を下りて希臘派の寺を見る。拜壇の下に穴あり、番僧其穴より眞鍮の鍾をつり下ろし、泉の水を汲みて與ふ。此水は其裏の山より湧き、拜壇の下を通り、寺の外なる「マリヤの井」となる。井は石を疊みて水溜を築き、アヽチをなせる一方の石壁に小さき樋口を設けて、水は下なる水槽に注ぐ。

ナザレ一村に古來唯一の泉と云へば、基督も曾て其水を飲み、また何處か其泉の傍に遊び玉ひしなり。

マリヤの家の跡と稱する羅甸派の御告の寺を見る。燈明、金具、油繪例の如くキラ〳〵しき中に、段を下りて石の圓柱二あり。一を天使ガブリエルが立ちし所と稱し、一は缺けて天井よりブラ下れるをマリヤが立ちし所と稱し、拜壇に「此處にて道肉體となりぬ」と記す。其マリヤの庖厨と稱する窖に煙突と稱するものゝつき出でたるは、實は古き水溜にて、煙突は其口なりと云ふ。此寺よりやゝ離れて「ヨセフの仕事場」と稱する所あり。こゝに堂を建てゝ、

ヨセフ鋸を手にして立ち、マリヤ紡ぎつゝ坐し、女の子じみたる十一二の耶蘇十字架を作り居れる油繪をかけたるのみ。基督のイザヤの書を朗讀して、「主の靈われに在す……此錄されたる事は今日爾曹の前に成れり」と云ひ、果てはふるさと人に崖より擠されんとせしまで烈しく其頑冥を責め玉ひし會堂は、塲所も主も幾變遷して、今其跡と稱する建物は希臘派の有に屬す。

ヨセフの子と呼ばれ、マリヤの子と視られ、弟妹に氣の知れぬ兄視せられて、雪の冬、泉の夏、野花の春、山の月の秋と、こゝナザレの山の上に過ぎし三十年の生涯よ。



マリアの井（ナザレ）

テベリア及湖

想へばなつかし、知りたし。君何を見て何を感じ、誰と語りて何を學び、如何に談笑し、如何に人の子と交り、子として、兄として、父なきあとの主として、何を削り何を作り何を想ひて日を送り玉ひしぞ。されど此は岩山の胸深く秘められし泉の歴史、土の下なる芥子の種の生涯、唯神之を知り玉ふ。

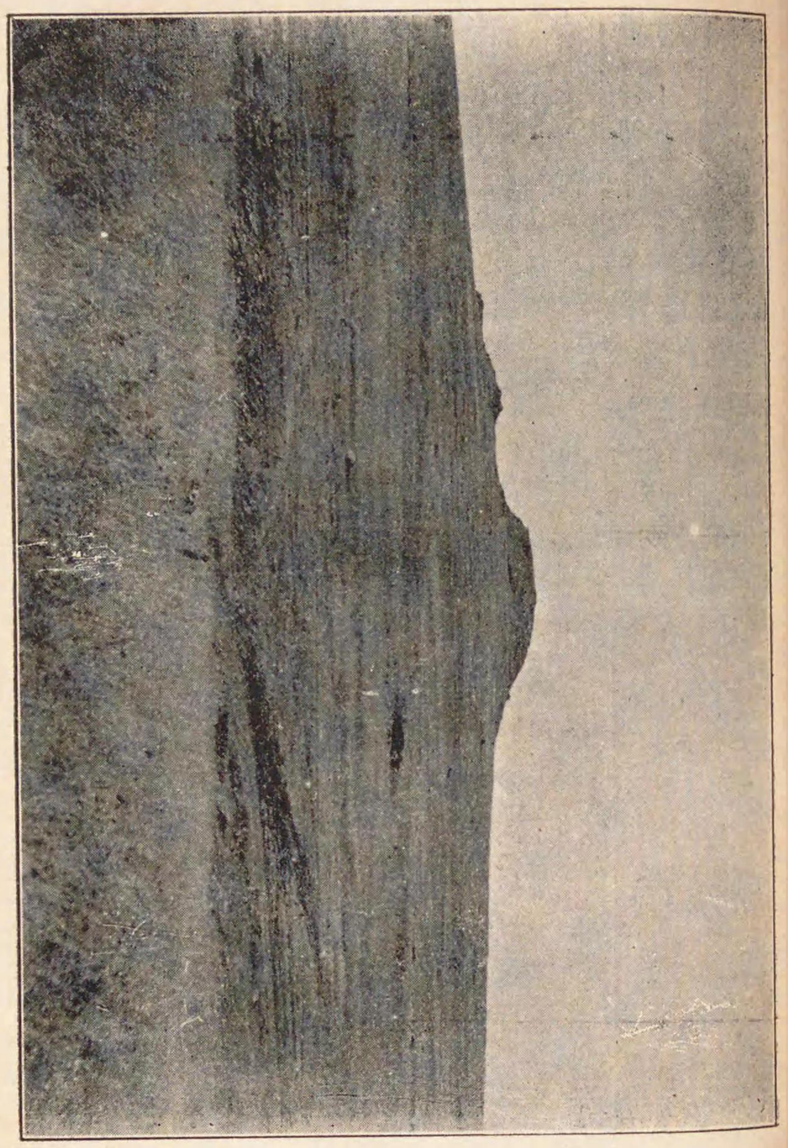
愚なる東方順禮の客は、なほも懲りずまに、例の好奇心もてナザレの邑の大工の店を二三軒覗きたれども、其處には唯生きむといそしむ可憐の人の子をのみ見たりき。

八日。朝六時、ガタ馬車にてナザレを立つ。マリヤの井に別を告げ、ナザレの丘を北へ越ふれば、なつかしき山の上の邑は記憶の底に沈みぬ。

山背の岨路を東へテベリヤの湖を指す。しばらくにして預言者ヨナの故郷昔のガテヘペルの跡と稱する寒村を左手の山上に見る。ナザレより約一時間半にして覇王樹茂る傳説のカナに到る。基督が婚筵の席にて水を葡萄酒に化せられしと云ふカナ、使徒ナタナエルの故郷のカナは

此處なりと何時よりか云い傳へて、此處の羅甸派の寺には、ふるき寺の名殘なる鋪石、柱の斷片などあり、また希臘派の寺には水が酒になりし石甕などありと云ふ。此は見ず。今は人口千に滿たざる寒村、ユダヤ人の子女客を見て走せ寄り、綿糸レースの花瓶しき、涎かけなど爭ひすゝむ。

カナを過ぎてやゝ久しく麥熟せるチユランの谷の平地を馬車は走り、馬蹄また漸く仰ぐ頃、右手に羅馬時代の街道の名殘と、ふるき建物の廢墟を見る。坂をのぼり果てうち開きたる山の原に出づ。



（のぼる途中の山の教堂）　三ぴきの山

傳說の說教山

道は帶の如く山の腰をうねる。山の頂は圓くして額に些の岩あり、後鬢に些の橄欖あり、勾配なだらかに低れて、山腹麥熟したり。案內者は、此れこそさいはひの山、即ち馬太傳五、六、七の說教の山と傳ふるものと敎ふ。たまたま馭者は鞭を途上に落しゝとて、馬車を山腹の道に置きつゝ、後戻りして見に行きたれば、余もやをら下り立ちて、道傍に生ふるシリヤ撫子、シリヤツユ葵、シリヤ女

郎花と名を知らぬまゝに仮に命名したる草花の美しきを摘みつゝ、悠々と四方を眺む。

ユダヤの山の磽确にしてイカツく、サマリヤの山の蹙りてせゝこましきに引易へて、此ガリラヤの山のさても舒々となだらかに人なつこさよ。湖は未だ見へざれど、其向ふの山々は道の行手に頭を露はし初めぬ。吾立つ山の裾は幾重の襞をなして谷に下り、春は蕨ももゆらんと思はるゝばかり草一面に生ひたり。辨當持ちてピクニックでもしたき山なり。此處を説教の山とし、また五千人を養ひ玉ひし所とする傳説は賢し。春三四月草青々と萠へ、

野花咲き乱れ、碧の空に日ざし和らかに、春風ソヨ〳〵と寒からぬほどに面を吹く時、語るも聞くも草を藉きて歯とし、其處の百合を指し、彼處の小鳥を指して主語り玉へば、皆立膝に頬杖つきつゝ其妙音に聞きとれしさまを思ひ見よ。五千人の養も斯る自然の中なればこそ。

「客人」と何時か歸り來し馭者が車の上より呼ぶ聲に驚かされて、冥想の人は東方順禮の客に復へりつ、また馬車に上る。

テベリアの邑

説教山々腹の路を行き盡して、ヘルモン山露はれ、湖畔の山露はれ、やがて蒼き湖の一片遙かの下に見へ來りぬ。また説教山の背に七百餘年前サラヂン大に十字軍を破りし古戰場と云ふ窪地の原ありて野人參の花雪の如くなるを見る。こゝに小供のバクシーシと呼びて走り寄るを、此も「サラセン」の子孫か、麥苅り居たる父なる者が土塊を投げつけて其子を叱りたるは、パレスタインに來て初めてこゝに氣慨の影を見て嬉しかりし。

馬車は山の傾斜を下りて、湖歩々に其姿を露はす。期し

たるよりも尙小さきかなこの山底の湖。爾が上に語られ行はれたる夥しき眞理の重味によくも潰れずして堪へ得しことよ。案内者は無頓着に指して、ヘルモン山の下、湖の北、山の左右より紆かき合せたるが如きは、ヨルダンの上流の湖に注ぎ入る道、湖の北岸、山と水との際に薺の如き靑黑きものあるはカペナウンベテサイダの舊跡、マグダラは彼丘の下に隱れて、此方の麓にテベリヤは潛むなど說きて示す。あゝ吾れ久しく此湖を夢みき。今明らかに吾眼其姿を見るに、一に何ぞ尋常の湖の如きや。虎刺めきたる荊棘生ふる阪路を下りて、馬車は十一時テ

ベリヤの邑に着き、獨逸人のテベリヤホテルに入る。チザレより約七里。

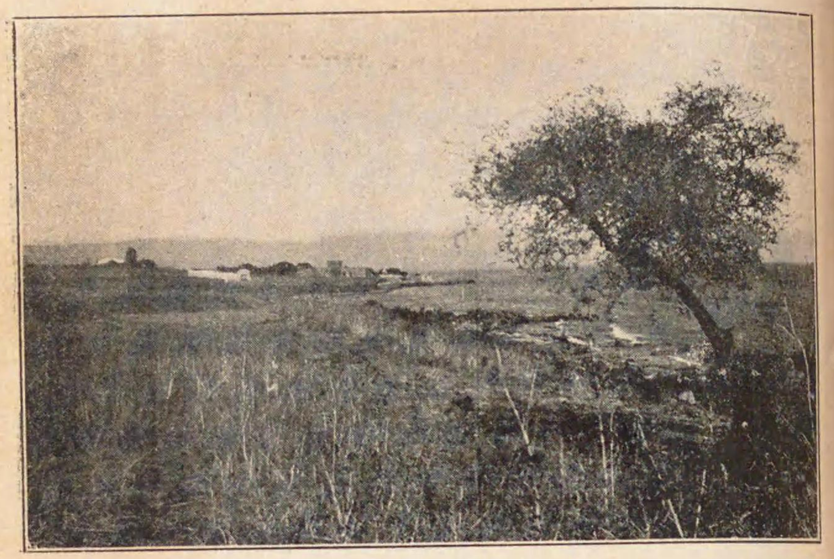
入口にふるき城壁の址あり。例の土と石の家の間稀に櫻欄の木あり。人口約四千、三分二は猶太人にして、此處は古來ユダヤ敎學の巢窟たり。テベリヤ湖畔にありて昔の名と共に邑の面影を殘すものは唯此テベリヤのみ。昔のテベリヤは更に南に立ちしと稱し、創立者たるアンテパヽヘロデの王宮の跡と稱するものなど、今の邑より十四五町も南の方に寄りて殘れり。

午後湖上の小舟に乗る。テベリヤの邑は脚を湖水に浸して建てられ、ふるき建物石垣などの水中に立つあり。曾て地震の爲に大部分は崩壞して、崩れし石などの今も水底に横はるを見る。

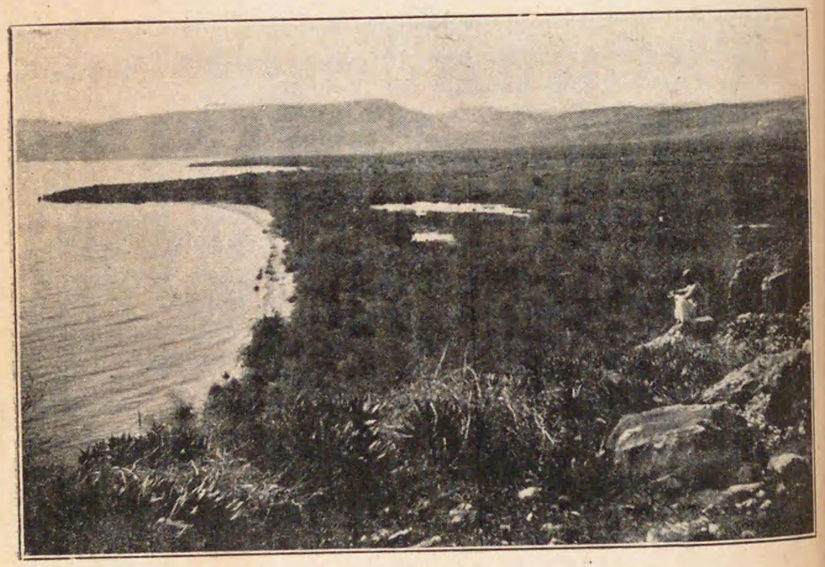
テベリヤをはなれて、舟は北にカペナウンの跡を指す。舟子三人櫂もて漕ぎしが、やがて風吹き出でたりとて、三角の帆を張りぬ。水の色は淺綠にしてよく澄みたり。舟子かはる〳〵鍵力のアキ鑵もてすくひて飲む。湖の深さは約百四五十呎なりとか。地中海面より六百八十呎も下にありて、四方山に圍まれたるに、時は六月、午後の日熱くして堪へがたし。蝙蝠傘を水に濡らして、雫の下に息つくに、五分ならず忽ち乾きて烈しき日を透す。風忽ち來りて舟脚瑟々と水を截るよと思へば、何時しか帆はぐたりと檣にからみて、舟子等うち唸きつゝまた櫂とりて漕ぎはじむ。

湖心を北へ走りつゝあたりを眺むるに、湖は南北に長くして五里、東西のいと廣き所も二里あまりに過ぎず。ヨルダンの流れ入る所は北に、流れ出る所は南にあのあた

りぞと分明に指す可くして然も水の路を見る可からざるは、前を承け後を啓く現在の湖に浮ぶ人の世のさまにも似たらむか。湖面より低きは二三百尺の丘高きも二千尺に足らぬ山々に圍まれたる中に、北は山やゝ緩く水に瀕して些の村を建つ可き餘地あれど、東の方一帶は山麓りて、眼に家を見ず、其赭禿げし山坡の所々に黄なる麥の此處にも人住むと知らすのみ。昔の繁昌も專ら湖の北と西とに集りしは宜なり。一體に木稀にして赭く茶色なる四方の山々、日に焦れて睡げにうすき靄を被たり。湖上二時間ばかりにして舟はカペナウンの跡なる小さき



カペナウムの跡



ゲネサレの野と湖

埠頭に果てぬ。此處らの石は多く玄武岩。

湖畔の舊跡

是れ曾て天にまで擧げられてまた冥府に落されたるカペナウンの舊跡なり。舟より上りて、杏畑を通り、羅甸派の建物の葡萄棚の下に逃げ込みて、烈しき日を避く。此處に古き礎の殘、柱の斷片、昔の名殘をとゞめて累々と保存せらる。信仰篤き百人の長がユダヤ人の爲に建てたる會堂の跡は此なるべしとの說あり。餘は寥々として見

るべきものなし。

やゝ久しく蔭に憩ひてまた舟に下り、岸に沿ふて次第に西す。此あたり岸は高からぬ丘をなして、麥其處此處に熟し、水際は稀に磯をなし、多く小さき岬をなして、其處に一叢此處に一叢、野生茨竹桃の紅に咲きこぼるゝを見る。やがてサイプレス茂りたる寺院あり。程遠からず岸より少し上りて水車の跡あり、滾々と水の溢るゝを見る。

一説には此處を新約のベテサイダと稱す。されど一説にはカペナウンのやゝ東ヨルダン川の湖に注ぐ口より少し上りて、川の東岸なる丘の腹に殘れる廢墟がベテサ

イダ、ユリアスにて、別にベテサイダなるものなかりしならんと稱す。又二つのベテサイダありしとも想像せらる。湖畔の古跡の位置に關しては學者の説も一ならず。要するに湖と山は今も昔のまゝにして、千八百餘年前には湖の北、ヨルダン川口附近よりゲネサレの野まで三里が程の間にベテサイダ、カペナウン、コラジンなどの一寸賑なる邑ありて悲喜憂歡さまゞの生活をなし居りしと思はゞ足りなん。

やがて舟をゲネサレの野邊につけさす。水の中に茨竹桃の滿開せるは珍らし。此處はマグダラとベテサイダ(西の)

の間に横はる幅半里長一里餘の野にて、一面の草地なり。向ふに説教山の裏を少し見る。野には泉滾々と幾處に湧きて小川をなし、猫の咽鳴らすが如き音を立てつゝいと面白げに湖に流れ入る。跪づきて其水を掬ぶに、やはらかく甘きこと譬ふべくもあらず。飽くまで飲みて波打際を逍遙す。リボンの如く白く狹き眞砂の濱には小さき貝殼の三四種あり。濱の背は木苺、荆棘、名を皆らぬ灌木叢をなし、人に驚く小蟹がさ〳〵と隱れ行く。砂の上に足投げ出して、足の尖より青む湖のあなた西日に明るき湖東の山を眺めて、豕の群の走りて水に溺れしは彼あた

りなりけんと思ふ。

再び舟に上り、テベリヤに歸る。ゲネサレの野の南に窮まる所、山の下、水の涯、十數戸の土の家、見る影もなきは、是れマリヤのマグダラの跡なり。

舟テベリヤに着けば、日傾きて湖上に風そよぎ初めぬ。邑の人々、或は水に浴するあり、馬を洗ふあり、磯に坐して晩涼を納るゝもあり。漁舟一二隻、出でむとして網を整ふるを見る。余も舟を下り、邑を出で、小蟹這ふ磯を北へ人無き方へ歩みて、湖水に漱ぎ、頭を洗ひ、手を洗ひ、石に坐してやゝ久しく默想す。

詩的ガリラヤ

詩的ガリラヤよ。爾の土は肥へ、爾の山は穏に、爾の湖の水は清し。「ガリラヤより預言者は出でしことなし」。されど神人はこゝに生れぬ。威の神をユダヤの山地に畏れしめよ。愛の神はこゝに在す。新約は終にガリラヤの産也。

自然兒基督、詩人基督、田舍漢基督、平民基督、爾は殿よりも寧此湖畔の山に祈り、此湖の舟の上に教へ、草の

上に説き、此湖上の漁夫を弟子とし、婦人子供を遠ざけず、爾の王國の礎を謙れる心の上に建て、智者達者に秘れたる眞理を幼子に顯はしぬ。爾ガリラヤにそだちてガリラヤは殊に爾になつかしきものにてありし。「われ蘇りて後ガリラヤに行くべし」とは人情の眞、爾が此湖のほとりに死後の己を現じ玉ひしは自然なり。

あゝされど一粒の麥死なざれば多くの實を結ぶ能はず。吾血を流さゞれば獣なる人を救ふ能はず。爾は其溢るゝ愛の驅るがまゝに、已むに已まれぬ父の命をかしこみて、雄々しくも都に攻上り、十字架の死に永遠の勝利を宣し

玉ひしよ。

蓋神斯く命じ玉ひき、「生命よ、展びよ」と。生命は展びざるを得ず。水は動かざるを得ず。見よやヘルモンの露落ちてこゝに此湖と湛ふるも、流れて死海に到らざればやまざるを。

あゝ神よ、「爾の愛と智と力の富はいかに深いかな」。爾基督をもつて己を我儕人の子に顯はし、基督によつて我儕人の子のすゝみて爾の子たるべき道をあざやかに示し玉ひぬ。肉に生れて肉に擄へられたる我儕人の子は、形によらざれば解する能はず。爾の愛子の肉にありける日、

譬喩にあらざれば語らざりし如く、其生涯、其生と死、彼其ものが大なる譬喩、大なるSymbolなりき。我儕彼によりて爾を見、爾に到るの道を見る。父なる神よ、爾如何なれば斯くは我儕人の子を愛し玉ふぞや。我儕斯く愛せらるゝによりて我儕は眞に爾の子なるを知る。願はくは光榮限なく爾にあれ。願はくは「聖旨の天に成るごとく地にも成させ玉へ」。

ヨルダン川（二たび）

九日。朝九時舟に乗る。湖の南岸セマークの村にて地中海濱ハイファ港行の瀘車に乗らんとするなり。遙に見送るヘルモン山を背にして、朝日流るゝ湖の上を、舟は帆を張りて南に走る。昔のテベリヤの址、また温泉の建物などを右手に見つゝ約一時間半にしてセマークにつく。例の土小屋の見るだに暑き小村なり。瀘車の時間に間あれば、行きて村の西六七丁、湖のヨルダン川となる所を見る。

湖の西南の隅、西岸の山南に盡き、南岸の谷西に窮まる處、水はおのれの進路を此處に見出して、ヨルダン川二たびこゝに生る。蒼く湛ふるテベリアの湖の水、行けど命せられてこゝに動きそめ、氣輕に小石の床にさゞめき、茨竹桃の紅に咲きこぼれたるいと小さき中島の根を洗ひ、少し落ちて深くなり、約十間ばかりの川を成す。此處に渡ありて、人は舟に乗り、馬は水を泳ぎつゝ渡るを見る。樹蔭なければ、崖の下に僅の蔭を求めて、晝食し、湖の水を掬びてしばらく憩ふ。

面白きかな、此川の生涯。ヘルモン山、背レバノン山の雨露滴り落ちてバズニー泉となり、千七百呎落下してヒュレーの小湖となり、更に六百九十呎落下して此テベリ

ヤの湖となり、猶更に六百十一呎落下して死海に沒す。

死海よりヨルダン川の源まで、直線にすれば百三十七哩、此テベリヤの湖までは徑六十五哩に過ぎず。然も迂紆曲折して水路は殆ど之れに倍す。水に命あり發展す、其露と滴り、湖と湛へ、川と動き、瀑と漲り、瀨と騷ぐは境遇也。水は低きに就かざるを得ず、流れて死海に沒す。死海の水死海に死せず、また天に昇つて雨と降る。彼に基督の生涯あり、此處にヨルダンの傳記あり。水の歷史も面白からずや。こゝに此ヨルダンと名のる水の滸に座して、湖を守り貌に、其水の行末を見送り貌に北方に立

つヘルモン山を望み、日の光に白き湖の面を眺め、足もとに歌ふ川を眺め、二週前に見し此川の流の末を思ひ、云ひ知らぬ感の湧き出づるを覺ふ。

二たび呼はむ、ヨルダンよ永久に流れよ。

ガリラヤ横斷

午后三時湖南セマークの村を滊車は發す。此は土耳其政府の敷設にかゝるもの、ダマスコよりハイファ港に通ふ線の一部にして、本年開通す。今は一週に發着三回のみ。

別にダマスコより砂漠を貫ぬて亞剌比亞のメッカに到る巡禮鐵道敷設中なりと云ふ。

セマークにて湖に別れ、ヨルダン川の鐵橋を渡りて川に別れ、ヨルダンの谷を出でゝ次第に西に上り、ギルボア山を左に、小ヘルモン山を右にとりて、兩三日前縱斷せしエスドレロン平原をこのたびは横斷す。北の山上にナザレは二たび白く名殘の姿を現はしたり。

停車場幾個か過ぎて瀛車はカルメルの山近くなりぬ。山下を流るゝ水涸れ〳〵の窪き小川は、エリヤがバアルの預言者を投げ入れて殺しゝと云ふキションの川なり。やがてアッカ（エークル）の平原を北に見、やがて砂地に棕櫚見へ、午後七時カルメル山下のハイフア港に着きぬ。

* * *

パレスタイン旅行はこゝに終れり。案内者ジャルルック君は翌十日南に歸りぬ。余は土京を經て露西亞に赴く可く、瀛船をハイフア港に待つこと五日。すぐ頭上には名高きカルメル山あり、窓より見れば波碧なる灣のあなたに十字軍の上陸地たりしアッカの邑白し。此に上らず、彼にも行かず、ハイフアの港の見物すらもせで、六月九日の夜より十四日の朝までホテル、ナッサルの二階に日々

寢ねて休養す。

雜俎

神は大風の中に在さず、芥子の種は廣き面積の土を要せず、縱四十里、横十餘里、パレスタインに來りて今更基督の活動範圍の小なるに驚く。

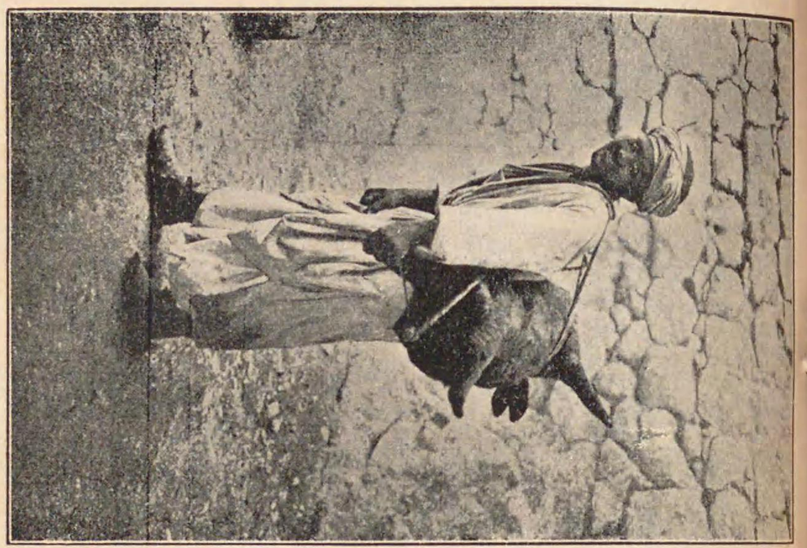
肉に於ける基督の形見は天空と山野とのみ。優去つて舞臺在り。肉消へて靈殘る。寂しきかな聖地。富めるかな聖地。

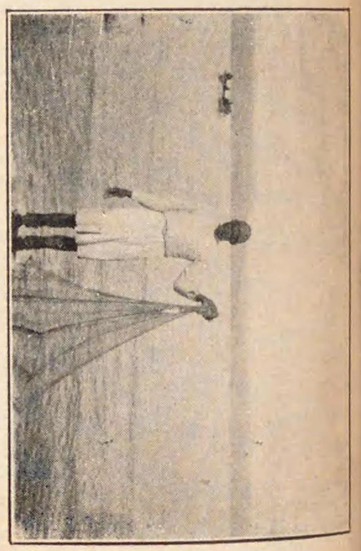
パレスタインは寺だらけ、眼まぐるしく、人の感興を妨ぐること夥し。火をかけてこと〴〵く燒き拂ひ、蠢爾たる人の子を追拂ひ、夕陽に空山を炙らせ、星月の夜に太古の水を覆はせ、限りなき寂寥を此土に王たらしめばと云ば〴〵思ひき。

パレスタイン旅行は春三四月を最も好とす。旅客の入込む地、一通りの便宜は備りてさしたる危險はなし。行脚に限るべし。余は一は健康の爲に、いつも馬車、馬、瀛車を利用し、用意して行きし草鞋に土つけざりしは、かへす〴〵も遺憾なり。

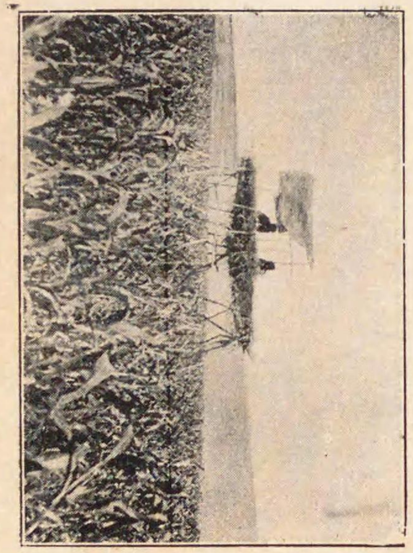
シリヤ土人は農牧を重にす。概貧。男女、手、腕、甚しきは顔に小さき割青せるを見る。金銀貨を綴りて婦人の飾とするは前に云ひたる如し。下流は多く跣足。上流婦人も晴着には黒、紫、紺などの大幅絹を頭より被る。土人は年々基督教化せられつゝあり。英國最も宣教に鋭意す。案内者ジャルルック君の曰く、土耳其政府は土人の重荷、むしろ英人の來りて取らんことを望む、埃及は英國の下に幸福也と。

蠅夥し。蚊もあり、蚤もあり。蛇はテベリヤ湖畔のホテルにてボーイが縞蛇を殺して直ぐアルコール漬にするを





カリラヤ湖の漁夫



猶太

見たるのみ。此處のホテルには色々剝製を賣れり。蝮蛇、蝎等あり。魚類には鮒、アブラメの類、餘は名を知らず。鳥は鶴、鷺、烏、雀、鷓鴣など多かりき。野獸は見るの機會を得ず。

植物はヨルダンの谷最も茂る。餘は水ある谷に綠を見るのみ。野菜には胡瓜數種、白瓜、菜豆、馬鈴薯、トマト、茄子等。果實は普通の杏、水蜜桃の如く肉白くして甘き杏、小さき林檎、桑の實等ありし。ダマスコ附近は果實の天國と稱す。

何の處か聖地ならざらん。今更に基督の足跡をパレスタインに探がすは愚なるかな。「肉は益なし」靈はもとより宇宙に滿てるものを、假令耶蘇の正札付の白骨を見出でたりとて、何かせん。さらば何故に余ははるゝ東より旅し來りしぞ。生命の水を求めしなり。

兩三年前、自らこれではならぬと思ひつゝさまゝ恥べき生涯を送り居ける時、或夜の夢に、余は母を背負ひてサマリヤの山の如き山路をのぼりつゝあり。渴堪へ難し。

不圖古き廢墟の累々たるほとり、緣尖りたる板岩の崩れて重なり合へる底より清水の涌きて糸の如く漏れ來るを見出でぬ。余は覺へず聲をあげて「母上よ、見玉へ、此は復活の泉に候」と叫ぶ、と見て夢さめぬ。

此たび門出の時、母の送別の歌に曰く、

限りなき生命の水の源に
導く神の惠をぞおもふ

限りなき生命の水の源はもと遠からず。王陽明先生の詩に曰く、

人々自有定盤針、萬花根源總在心、

却笑從前顛倒見、　枝々葉々外頭尋。

又曰く、

無聲無臭獨知時、　此是乾坤萬有基、
拋却自家無盡藏、　沿門持鉢效貧兒。

何處に迷いて神を尋ね、何處に向つてか基督を求めん。
限りなき生命の水の源は
おのが心の奥にぞありける

マリヤは墓の外に立ちてなげきつゝ墓に向い俯みて、二人の天使白き衣を着イエスの屍を置きたりし所の首の方に一人足の方に一人座し居るを見たり。天使かれに曰いけるは、婦よ何ぞ哭くや。彼こたへけるは、我主を取りし者あり、何處に置きしかを知らざれば也。斯くいひてふりかへりイエスの立ちしを見る、然れども|イエス|なることを知らず。|イエス|彼に曰ひけるは、婦よ何ぞ哭くや、誰を尋ぬるか。マリヤ園を守る人ならんと意ひ、彼に曰ひけるは、君よ、爾もし彼をはこびうつゝしならば、何處に置きしか我に告げよ、我これを取るべし。|イエス|彼にマリヤよといふ。婦かへりみて彼にラボニと曰へり、之をとけば夫子なり。|イエス|彼に曰ひけるは、我に捫ることなかれ、我いまだ

我父にのぼらざれば也、わが兄弟に往きていへ、我は我父なるはち爾曹が父わが神なるはち爾曹が神にのぼると。マグダヲのマリヤ主を見しことゝ主の斯くおのれに言ひたまへることいふ事を弟子たちに往きて告ぐ。

（約翰傳第二十章十一節より十八節に曰る）

史の海詩の嶋

（ハイファより君士丹丁堡）

フイニシアの面影

六月十四日、朝九時、パレスタインの土を足より拂ふて、佛國郵船オリノク號に乘込む。君士丹丁堡まで、寄港日數を合せて約一週日の船路、いさゝか弱れる体に賄無しの甲板生活少々のみ込めざれば、順禮の客こたびは紳士

と化けて二等船客たり。

午前十一時、船は樓櫚の港ハイファをあとにしてアッカ灣の綠波を截り、白きアッカの邑を右に見て地中海に出で、古昔のフイニシアに沿ふて次第に北上す。船尾甲板の日よけの下、幾多のモンク氏、土耳其帽氏と共に、或は舷に凭れ、或は腰掛に倚り、双眼鏡もてしきりに陸の方を眺む。

うち見たる所、山を負ひ、海に瀕せし西向きの地狹うして帶の如く、丘に耕地多からず、海岸は出入少なくして良港灣なるものを見ず。ハイファを出でて航行約二時間

にしてスルの邑あり、海邊の丘に白き家點々、人口七千と稱す。古のツロの跡也。ツロより北すること約八里にしてサイダの邑あり。此は人口一萬二三千を有すと云ふ。昔のシドンの跡也。背後に高く堤防を築くは香柏木のレバノン山脈也。斯山と地中海との間に夾まれたる西日まぶしき一帶の地、是れ曾て貿易殖民を以て物質的文明の傳播者として古代史に鳴り、其冒險の氣象は化してカルセージとなつて一たび雄を羅馬と競ひしフイニシア人の夢の跡なり。レバノン連山は後より驅つて曰く、顧みな、出でよ、海に出でよと。海は招きて曰く、來れ、爾の土

は狹し、我のあなたには廣き土あり、我が爾に與ふる道は四もに通ずるにあらずやと。こゝに古昔のフイニシア人ありしは怪しむに足らず。されど今は西日淋しく山にさして、地中海の波昔を其岸に歌ふのみ。

金を流す落日の海を分けて船は午後六時ベルートの港に着く。此はシリア第一の歐化したる港也。人口十餘萬。山に據り海に瀕し、やゝ神戸の趣あり。鐵道ありてダマスコに通ず。

多嶋海

十五日。碇泊。佛蘭西の船はよろづ奇麗にして、佛蘭西人は快活也。碇泊の暇に、眞黑に汚れし火夫水夫等四等客の彈くヴイオリンの調に相擁してヲルツを躍る。

十六日。正午ベルートを發して西に向ふ。是れシリヤの見納めなり。レバノン山依々として久しく我船を目送す。風浪あり。

十七日。依然として風浪あり。食堂に出でず、ビスケットを嚙りて、船房に仰臥しつゝ東坡詩を讀む。ベルートより同室となれる土耳其の壯年紳士、同病相憐みて甜橘

二個呉れたり。紳士は久しく英國にあり、葡萄酒商。十八日。眼ざむれば船已に小亞細亞、希臘間の多島海に入りぬ。ロドスの島は夢の間に過ぎ、サモスの島已に近し。急に元氣つきて甲板に出で眺むる程に、忽ち白雨あり。亞細亞の方は朝日さしながら、希臘の島々は雨にかき消されつ。海、虹を吐きて、七色のアヽチ眼もアヤなり。

日の本の御使來ぬとイーギアの海神建てぬ七色の門

など打興ずる程に、雨やみ、虹収まり、滑らかなる水に

日光流る。

美なるかなイーギアの海。其海、其島、さながら我瀬戸内海にあるの感をなせど、翻つて思へば身は現に歐亞の間なる多島海にあり。此海に飛石の如く散れる大小の島々、其數幾千ぞ。一として尋常のものにはあらず。分くるに惜しき碧玉緑玉の水に浮べる島山の、小さきには詩棲みて紫がかりし灰色の岩のあなたより音なきに小琴響き、大なるには葡萄の畑緑級々、白き家茶色の家里をなして島の生活旅人を羨ましむ。風なきに帆を張りて來る漁舟には雅典を逃れし英雄や乘り居らん。完きゼヌスの

像の埋れ居る島もあらん。史の海、詩の島、惜むべし詩人をしてこゝに過ぎらしめざるを。

午前九時サモス島のワチー着。此島はヨハネが默示錄を書きしと傳へらるゝパトモスの島に近く、全島葡萄畑なり。午后四時拔錨。

十九日。朝スモルナ着。小亞細亞第一の港。人口二十餘萬。灣深く入りて大なる長崎の如し。夕方解纜。

君士丹丁堡へ

二十日。起き出づれば、船まさにダアダネルス海峽を過ぐ。是れ所謂ヘレスポント海峽、波斯の陸師の入寇にも、亞歷山の東征にも共に此處を渡りしなり。兩岸は五六百尺の山。間は濶きも一里餘、蹙れる所は水の上十丁餘に過ぎず。傳說のリアンデルならずも、夏ならば泅ぐに造作もなからん。其著しく相蹙れる所、亞細亞の岸にシャナク、カレーの古城あり。君士丹丁堡を攻落すまで、土耳其人の都せし址。水に臨むで砲臺あり、邑あり。土耳其砲艦三隻浮ぶを見る。歐岸にも砲臺あり。海峽を北に出ぬけてマルモラ海に入る。

マルモラ嶋を東に見て、北へ行く〳〵一たび遠ざかりし歐亞の陸はまた東より西より漸く相近づき來る。船は次第に歐岸に近づき、第二露土戰爭假平和條約に名高きサン、ステフアノの邑を過ぐれば、行手の海を限る丘の上、此處にも其處にも回教寺院の建物を見る。南部の丘の上に、君士丹丁堡の背を露はすなり。夥しき回教寺院の數よ。大泡球、小泡球のかたまれる如き圓屋根を擁して鎗の如く簇立する呼樓、白き一群あり、銀鼠の一群あり、赭白き一群あり。君士丹丁堡ならで斯る處のあるべしや。

さらばサン、ソフィアの大伽藍も其中にあるべし、いづれそと同室の紳士に問へば、眉を顰めて、願はくはあれこれと指さして問ひ玉ふな、官憲に怪まれては事面倒になるべし、と口ごもる。

やがて船は其丘の端なる綠樹の中に殿白き宮城ケ崎をめぐり、クリミヤ戰爭の野戰病院地としてナイチンゲール女史に名高き亞岸スクタリーの邑を右に見て、左に初めて金角灣を挾む君士丹丁堡の全景を見。こゝに船首をめぐらして、午後六時ガラタの埠頭に横づけす。

土京雜記

世界第一の君士丹丁堡

マルモラの海袋の如く括り寄せられてボスフォロス海峽となるの頭、こゝに歐亞の關門をさへて立てる君士丹丁堡よ。千五百餘年前帝コンスタンチンが相して都となしゝも無理ならず。川の樣なる海峽越しに向岸の亞細亞は與に語るべく、背後は即ち歐洲。日夜に流るゝ碧潮の北すればすぐに黑海、南すれば終に地中海に通ふ。マル

最左側の円屋根はサンソフィアなり

土京ガラタの橋

土京の狼犬

モラの海何ぞ美なる。府の南に青々と見る眼沓かに、風そよ吹きて、其處に煙往き帆來る。金角灣は水牛の角の如く東南より西北かけて深く入ること二里、深二十尋、幅は四五丁の間にあり。灣を夾むで、双方の丘の上まで一面の建物、こゝに東西洋の人を集めて今百十萬の生靈を養ふ。灣の南の一區をスタムブールと稱し、舊市街たり、灣の北なる山手は居留地のペラ、其下なる船つきをガラタと稱す。二條の橋金角灣を横斷して南北をつらね、こゝに總稱の君士丹丁堡あり。ペラの高みより瞰むれば、灣の向ふの丘は水際より頂かけてさま〴〵の色なる建物

累々と積上げられ、其處にも一群、彼處にも一群、圓屋根と鉾形の呼櫓より成る回教寺院いちじるしく、眼下の灣を横斷する二條の橋には蟻の如く人渡り、灣口には鯨の如く滊船泊し、眼を東に放てば水を隔てゝ亞細亞のスクタリーの邑人家を數ふ可く、數知れぬ大小船舶は海峽を縱横に往復す。

美なるかな江山、壯なるかな新月の都、占め得たる其形勝より云へばまさしく世界無双の君士丹丁堡なるべし。されど可惜、「近東の病人」はこれを不潔不便の都となし了りぬ。

犬

余は六月廿日の夕君士丹丁堡に着し、ペラ街なるロンドンホテルに宿り、翌日出でて市中を見物す。

百十萬の都會、瓦斯燈あれど電燈なく、電話なく、舊式の鐵道馬車あれど、電車は唯先年如才なき獨逸皇帝來遊の結果としてガラタに短距離の地中電鐵かゝれるのみ。

皇帝陛下電氣を嫌ひ玉ふ故なり。鋪石の凸凹、先づ行人の頭痛を起すに、評判はかねて聞きたれど今更に驚かる

るは犬なり。君士丹丁堡に多きものはと云はゞ、土耳其帽に犬、君士丹丁堡の住者の數はと聞かれなば、百十萬の人間と、犬は取調べ中と答ふる外なからん。先年土耳其に遊びし某氏は一丁内に二十五疋を數へしとか。往來しげき街中に所嫌はずぐたりと寢たるあり、のそりとあるくあり、禿げて紅き皮膚を出したる、狼の如く瘠せたる、大小醜美犬と云ふ犬の種類を盡して、二歩に一疋、十歩に五疋所謂算を乱して足の踏場に惑ふ。此は皆浪犬、飼主なければ、常に飢へていづれも喪家のもの也。潔癖ならぬ土耳其人等が夜になればさま〴〵の塵芥汚物を街上に投棄するを、待ち搆へたる最寄の犬等得たりや應と突貫して凡そ食へる限りは片端より食ひ盡す。ドウしても犬の胃に入り得ざる代物をば、人間の掃除夫來りて掃除す。宿無し犬も一種の掃除夫也。犬の糞はまた革なめしの用に供せらるゝと云ふ。されば生活の必要上、君士丹丁堡の犬は仲間をつくり縄張りを定め、他の犬を一歩だに踏み入らせず。人には吠へざるも、他の町の犬來れば、寢たるも起きて、一齊に吠へ立て、追ひ拂はざれば已まず。動物社會の生活難は犬も人も同樣にて君士丹丁堡の犬の生活情態はまさしく國を限りて他を排

斥する二十世紀初頭の人間社會を示す。

余がペラ街よりガラタに下らむとする時、路傍鋪石の上に人多くたかれるを、何ぞと見れば、黑斑なる母犬の今生みたる五六疋の子犬を頻に舐め居るなり。不圖「今更に何生ふるらん竹の子のうき節しげき」の歌を思ひ出でゝ、子犬の行末を思へば、頭岑々と痛むを覺へき。

土耳其人は犬を不潔視す。不潔視して放擲す。總じて放擲主義の土耳其也。

ガラタの橋

ガラタに下りて名高きガラタの橋を渡る。金角灣を横斷して、長さ二百餘間。船脚の木橋也。中央二十間が程開閉し得べく造らる。外に猶一つの橋あり。二ッの橋共に官設にして橋錢を收む。一人につき十パラ即二錢餘なりしと記臆す。車馬は記臆せず。一年の橋錢百五十萬圓に上ると云ふ。鐵の吊橋と云ふ所なるべきも、年去年來唯是れ此木橋、橋板ふるびて凸凹缺隙を生じ、車馬通る毎にガタ〳〵として、名の如くまさにガラタの橋也。

ガラタの橋を渡り、スタムブールの市街をのぼりて、丘の上なるサン、ソフィアの寺に到る。肉色に塗られし大伽藍也。サン、ソフィアとは神智即ち基督の寺を意味す。是れ千四百年前東羅馬の帝ジャスチニアンの建立する所、約一千萬圓を費やし、一萬の工人と一百名の棟梁を役したりと稱す。五百年前回教徒の手に落ちて、曩時希臘派基督教の大本山今は回々教の巨刹たり。靴をぬぎ、番人の貸す上靴をはきて入る。成程大きなもの也。中央大圓蓋の直徑十丈、高さ十八丈、其根基に四十の窓ぐるりとあきたり。内部は一切石造にして、數知れぬ美しき大理石の柱は、昔皇帝の威光もて東歐西亞のさま〳〵の神殿より奪ひ來しものとか。帝希臘、亞細亞の神殿のものを奪ひてこゝに斯寺を建つれば、土耳其人また之を奪いておのが寺院とす。入口の大扉に十字架を削り去りたる跡あり、壁畫の人物を白く塗り消したる跡あり。皆新主人の所作也。されば彼等は奪へるものゝまゝ奪ひかへされむことを恐れて、露西亞人にあれ希臘人にあれ凡そ希臘教徒の此寺院に入るを喜ばず。床の上は

一面に七嶋むしろを敷きつめ、大なる圓き盾の如きものにコランの文句を金字に大書したるを所々に掲げたり。正面より入りて直ぐの所に大なる大理石球を据ふ。石球は手洗水也。勞働者らしき男の入り來りて靴を脱ぎ、先づ足を洗ひ、手を洗ひ、さてむしろの上にすゝみてメッカの方に向ひ、一起一拜一伏一拜するを見る。また他の一隅に白髯の翁の兩三人の弟子らしきに向ひてコランを講ずるを見る。一巡見終りて更に二階の廊にのぼる。眼を驚かす大理石をば鋪きつめ、如何にしてこの重量を支ふるぞと驚かる。昔曾て地震の爲に此大伽藍もくるひを

生じたるを修理して今に殘れるなりとぞ。日本の如き地震國にては所詮長くは無事なるまじき建物也。

ポスフオロス

二十二日。土京唯一の日本部落なる中村日本雜貨店の支配人N君の案内にてポスフオロス見物に行く。ガラタの橋より小蒸氣に乘る時、橋も轟に一隊の兵士の過ぐるを見る。此は今日金曜日の禮拜に皇帝陛下の供奉する近衛兵の禁城に赴くなりとぞ。餘事は兎もあれ武勇は人に讓

るぺくもあらぬ土耳其兵士が銃劍をガラタの橋の朝日に輝やかしてねり行くさま立派と云へば立派也。皇帝陛下は非常に暗殺を氣にし玉ふとぞ。

船はガラタの橋を離れて、海峽に出づ。海峽は長さ約七里、幅いと狹き所は三丁に過ぎず。潮流の上層は黑海に流れ、下層はマルモラ海に流るゝと云ふは奇也。船は歐亞、亞歐と千鳥がけに寄りて行く。兩岸は綠樹茂り、水に臨みて彼に離宮あり、此に別墅あり、海水のいとよく澄みたるに、別墅の庭より子供の釣を垂るゝもあり。やがて歐岸に古城址あり。山を縫ふて水は通ひ、水を趁ふ

て舟は行き、所謂「舟行若窮、忽又無際」もの五里。黑海の口遠からぬ歐岸のメサルブルヌにて船を下る。

此處も都人士の避暑地にて、ホテルあり、カフェあり。侍從武官アリ少佐と云ふ人に會ふ。中村商店の知人にて、N君より日本語を習ひ、片假名の手紙を直して貰ふ程なり。三十左右の柔和なる先開けたる紳士也。水畔のカフェにて同少佐より櫻桃、パン、珈琲の馳走になり、其れより三人驢馬にて山の手の遊園に上る。海邊には棚に藤の花咲き、山には栗の花咲き、アリ君は余の英語程には日本語をつかひ、相逢ふ人々は帽と言語の外はいとよく

日本人に似通いて、身の土耳其にあることをえばし忘れ果てぬ。

山上の遊園には泉湧き、水に臨みて土耳其人の音樂あり。男五人眞面目な顔にてヴィオリン、マンダリン、タムブーリンなど鳴らして、哀しげなる歌を歌ふ。N君とアリ君は水煙草を吸いつゝ、余は水を喫しつゝやゝ久しく其單調なる音樂を聞きたる後、山を下りてまた驢馬にて海邊に歸り、改築中なるアリ君の別墅を見る。三階十四間にして、後に些の庭あり、すべて百五十坪程の地所、改築費を合せて千五百磅(一萬五千圓)なりとアリ君は語りぬ。

こゝに四十餘のでつぷり肥へたる土耳其帽の紳士來り、覺束なき日本語にて挨拶す。此はアルメニヤの穀物商にて、久しく英國にあり、熱心に日本語を獨習しつゝありとてポッケットより羅馬字の日英會話書を出し見せぬ。やがて四人馬車にて海岸を少し南に戻り、歐人のポロ(馬上の打球戯)をなすを見、小蒸氣にて君府に歸る。

土耳其の赤帽を見れば直ちに支那の辮髪を想起す。近東の病人と極東の病人とは多くの點に於て、症狀頗る相似たる所あり。

土耳其人の評判を氣にすることは夥し。君府の稅關に於て、余の旅囊を撿せし土耳其官吏、一冊の書を取り出して、此は何です。案内記です。土耳其の事を惡く云つたものではありませんか。此類也。畫はがきにても、土耳其の風俗名所などあるものは、土耳其郵便局より出せば直ちに沒收せらるゝなり。郵便局と云へは、ペラ街頭土耳其の郵便電信局を鼻さきに置きて、英佛露獨墺とおの〳〵自個の郵便局を有し居るは奇觀なり。

鎖國主義の土耳其にて旅券を得るは容易にあらず。エルサレムの警察署にて、余は旅券の裏書を賴みに行きし時、旅券を貰ひに來し商人の散々に叱らるゝを見たりき。ロボルト君余に囁やいて曰く、彼等は一枚の旅券に往々二十法も其上もとらると。君士丹丁堡に於ても亦然り。

土耳其人の挨拶は、右の手をつまみて、丁寧なるは俯みて足より口、口より頭にあげ、略式なるはたゞ口より頭に擧ぐ。頭も心もアナタのものと云ふ意味なりとぞ。客には必ず珈琲と水をすゝむ。珈琲は猪口大のいと小さき

碗にて、砂糖を和せざるを通とす。水はコランの酒を禁ずるがためにすべて水を珍重する也。

官尊民卑賄賂公行は云ふもくだなり。巡査の職務は無論保護にあらず、萬一盜を捕へし時は盜と盜品を山分けするにあり、食物物品何くれと所謂徵發するにあり。市廛の漢子胷に勳章を佩ぶる者あり。買ひたるなり。

土耳其はすべて亞剌比亞字を用ゐ、右より左に書す、字體速記文字の如く頗る美術的也。土耳其の時計は六時を十二時とす。

回々教と武力を以て興りし國、小學校としてコランを教へざるはなく、また各種兵學校あり。中學のやゝ高等なるものとては、ペラのロバルト、カレージあるのみ。歐亞の人の集ふ所、大抵の者は二三ヶ國語を知る。佛語は普通。

金角灣の奥、橋の上手に、九千噸の土耳古軍艦あり。N君の話によれば、半歲も此處にあり、晝は水兵の洗濯物乾し場となり、夜は涼みがてら軍樂隊の遊び場となるのみ、二年に一回英國あたりへ乘り出して修繕に行くが海軍士官の仕事なりと。

土耳其固有の家の、往來に面する側には極めて細き網目

格子ありて窓と云ふ窓なし。所謂婦人を箱入にせんが爲なり。土耳其の語には女と云ふ語ありて、妻と云ふ語なく、吾女、君女と云ふのみと聞く。アリ君に問へば、一夫四妻はコランの許す所と云へど實行するは亞剌比亞の人達のみにて、自分等は一妻の外なしと辯じたれども、蓄妾は到る處に行はる。美人の產地は高加索のジオルジアを以て最とし、美にして所謂敎育ある婦人は數千往々にして數萬法を以て賣買せらるゝと云ふ。君士丹丁堡には中等社會はなし、或者は絹を着、或もの

は檻樓を着る。

土耳其人の日本人に對する即今の態度は唯一也。己が深怨ある露西亞に勝ちて吳れし日本、始終己を窘めくるす西洋白皙人の鼻を折りし同じ東洋人の日本、是れ彼等の日本觀也。滿足の裏には嫉妬もある可し。余の滯留中皇帝陛下は中村氏を召して、日本皇帝回々敎徒となられ、回々敎を日本の國敎とせらるゝとは眞乎と問はれしと云ふ。此は同敎の高僧某が陛下に向つて、日本皇帝若し此敎を奉ぜられなば、此敎の元首たる位置は陛下より去つて日本皇帝に歸すべし、由々しき大事に候、と吹き込みたるが故なりしと傳ふ。

極東の病人は已に起き上らんともがきつゝあり。近東の病人も此まゝにはやまじ。日露戰爭は確かに、電氣を他の亞細亞諸國にかけしが如く土耳其にもかけぬ。土耳其人は素より匕を投ぐべき劣等人種にあらず。其ずぼら主義はキチョウメンなる故グラッドストン翁が癇癪の種となり、荷物ぐるみ歐洲より追ひ出すべしと翁は罵りたれども、公平なる眼を以て見れば、十字軍人の子孫未だ必しも新月の民を奴僕視すべく優れるにあらず。土耳其の一新更始は必始まらざる可からず。而して土耳其の甦生を妨ぐるものあらば、其は回々教と相抱擁する專制政府ならざるを得ず。而して尤も土耳其の爲に憂ふべきは日本の武力功を奏せしを見て素より勇なる彼等がいよいよ武力によつて立たむとする事也。日本にして眞に醒めずんば、日本の所謂戰勝は土耳其の前途をも誤ることゝなるべし。東に日の國あり。西に月の國あり。日月もとより相思ふ。新月のいよ〳〵張りて圓かなる鏡と照むことは日の國の民の祈ならざる可からず。

バルカン半島巡過の記

珍らしき日本人

六月二十三日午後八時、余は土京三日の滯留にわがため東道の主人たりし中村商店のN君と手を分ちてスタムブール發維也納行の滊車に乘りぬ。君士丹丁堡より露國に入るには、オデッサまで二日の船路、これを普通として、ルーマニヤのコンスタンザまで船其れより滊車にて露境に入る道もあれど、前者の船には十日を待つの要あり、後者も三四日の間あるに、土京の旅館に重からぬ財布をいたづらに輕くするの愚を思ひて、ちと迂遠なれどブルガリヤよりルーマニヤを通りて露國に入らむと決せしなり。

夜もすがら乘合のはなつ酸ぱき臭の滿ちたる車室内にうと〳〵と眠りつ、窓の朝日に倦眼を摩すれば、二十四日也。やがて滊車は土耳其領より東ルメリヤに入る。伯林條約にて土耳其の割き取られし地、今はブルガリヤ領たり。こゝに旅券及び手荷物の檢査あり。此滊車

に日本人乘れりと云ふ事何時となく知れて、余の旅券は車中の人の手より手に渡り、或は土耳其語、或はブルガリヤ語(露西亞と同系のスラヴ語)或は獨佛語にて答を得せぬ話しかけられ、停車場毎に日本人見物の群衆は余の窓前にさながら山をなす。元來日本人の足跡あまり多からぬ此地方、おのれ等を窘めし土耳其を窘めし其露西亞に勝ちたる日本人とは如何なる人間かといとゞしく好奇心のつのれるなるべし。力の歎美は何處も同じ事なり。馬鹿〳〵しくもあり氣恥かしくもあり、窓の蔭に小さくなり居れば、窓の外にてしきりに東郷〳〵と呼び出す。東郷は日本人の代名詞となれるなり。車内の諸子無理に余の肩をとらへて窓へ突出す。風采颯らぬ此日本人は餘儀なく髯だらけの寢ぼけ顏を窓より出して、ブルガリヤ萬歳を叫びつ、一禮して匆々に窓の蔭に隱れぬ。ブルガリヤの人々は三等室の窓に顯はれ出でたる「東郷」の顏と、過る二年間耳にしたる「日本人」の動作の間に連鎖を見出すに困難したるなるべし。

滊車は半日バルカン山南の野を走る。沼澤多く、楊生ふる泥川に沿ふて牛馬の牧綠に、麥よく熟し、丘の畑に葡萄茂れり。午后野迫りて山となる。紫雲英など草花美し

く、さして高からずと見る南の方の山に雪白く殘れるも何となくアルプス近き思あり。薄暮ソフィア着。余は乘換の爲こゝにて下車す。ブルガリヤの首都は山腹の原に據りて北面す。人口五萬餘とぞ。電車ありて相應に賑やかなり。セル并アのベルグレードと共に、バルカン半嶋低氣壓の發生地、人物はブルガリヤの井伊たるスタムブーロッフが血の痕いまも乾かぬ物騷なる所、政爭烈し。

瀛車を待つ間、今日唯一塊のパンにて過ぎし腹をこしらふる所に、逸早く新聞記者の訪ひ來る者二組。

午后十時ダニューブ河畔のロスチユック行の瀛車に乘る。

ダニューブ河

廿五日。オスマン、バシヤに其名しるきブレヴナは夢の間に過ぎて、瀛車はバルカン山北ブルガリヤ本部の露の野を過ぎつゝあり。露土百戰の跡、夏の朝風ソヨ吹きて、苜蓿の花に朝日こぼるゝ。

今日も車内の客は入りかはり、立かはり、來り覗く。エスペラントにて話しかくるあり。畫はがきを呉るゝあり。夥しく人の好げなる六十あまりの老火夫は、大きなるよ

どれ手をもて余の手を握りて打ふること十數回。連日のくだびれに鳥打帽眼深に引てうつら〳〵と居睡れば、いつの間にか彼老漢子また他の見物人を連れ來りて、余の帽子をとり去り、余の顯を擡げ、皆に見せ終りて、而して更に手を握りて打ふること三回す。遠來の珍客は溜息と共に觀念してオトナシク見せ物となるのみ。

正午ダニユーブ河畔のロスチユク着。水の上五六丁はある可き巨浸、折からの出水に濁流滔々として繫がれし船も危げなり。水雷艇一隻ブルガリアの國旗を翻へして溯るを見る。やがて小蒸滊にて河を渡る。

ルーマニヤ

ブルガリヤの岸をはなれて、斜に河を渡り終ればルーマニアのジユルジオヴ。例によつて旅券の檢閲と、荷物の檢査あり。川一重にて小さき國の何もかも別々に睨み合ふも可笑しなものなり。酸乳を飲みてやゝ久しく滊車を待つ程に、ダニユーブの河上眞黑になりて、雷鳴り、先追ふ風の黑きむとより眞白の夕立ざあと降り來ぬ。ブルガリヤの方はかき消されて、滔々たる大河の流れ、億萬

無數の銀箭を迸しらす。

緣あれば今こそ見つれ名にしおふ

ダニューブ河の夕立の雨

日傾きて瀘車ジユルジオヴを發す。此國もブルガリヤと同じく農業國にて、此處もブルガリヤと同じく日本人珍らしさに見物山の如く、何處も變らぬ少年の強き日本人見んとゆるぎ出づる瀘車追かけて窓の内覗きたる、可愛ゆし。國都ブカレストに着けば、イルルミネーションは晝の如く、まさに博覽會の開會中なり。行手を急げば、直ちに市街を馳せて北の停車場に到る。總じてルーマニヤは人口六百萬の小國ながら、一體に其人キリヽと氣が利きて、國都ブカレストの如きも、電燈、電車、鋪石並木の街建物夜目には殊に美しく、流石にカアメン、シルヴアを國母にいたゞくルーマニヤの都と見受けぬ。夜半ブカレスト發車。

ガラツの半日

二十六日。朝まだきガラツ着。此はダニューブの末流にあるルーマニヤの港也。人口六萬餘、船舶輻輳し、電車

鐵道馬車あり。偖これより如何なる道をとつて露西亞に入らむかと、停車場にて聞き合はすれど言語通せず。他の旅客四五人何やらん言噪ぎて馬車を雇ひ呉れたれば、兎も角も荷物と共に打乘りて馬車の行く所に行くに、馭者の要領を得ざること、猶客の要領を得ざるが如し。睡さは睡し、腹は減る、草臥れはてたる揚句を無暗に馬車にてひき廻はされ、癇癪むら〳〵と起りていさゝか眼に角を立て、オイ、どうするのだい、とうつかり日本語にてちと聲高に云ひたるに、驚きてふりかへりたる馭者の顏を始めてよく見れば六十餘の如何にも無邪氣なるスラヴ顏なるに、氣耻かしくなりて、今は詮方なし、英國領事館に行くべしとて、英國領事館、〳〵とうしろより聲をかく。馭者君館の所在を知らず、しば〳〵人に聞きて、漸く館にいたる。時早くして門閉ぢたれば、一先づ附近の此でもホテルの名ある怪しげなる宿に荷物を卸して休息す。馭者君は償を貪らずして去りぬ。

やがて再び英領事館を訪ふ。領事は猶出勤せずして、髮を奇麗に左に分けたる三十左右の色淺黑き巨眼瀾面の書記生あり。馬耳塞の商業學校に學べるモンテヂグロ人なりとか。要を聞きてほゝ道を敎へ、猶埠頭の露國滊船會

社に就て聞かるべし、佛語は少しは話さるゝならんと云ふ。耻かしながら解せずと云へば、自分の如きは不肖ながら七ケ國の語を話す、とぢろりと其大なる眼に見られて、一言もなく禮云ひて罷りぬ。偖埠頭の露國會社に赴くに、帳場の紳士等思ひがけなき日本人の客を迎へてニヤリ〳〵笑めども言葉通せず。露西亞のオトナと日本のオトナと相見て唯茫然たることしばらく、一人は不圖思ひ出でたる如く「サアシヤ〳〵」と云ひつゝ奥へ入りしが、やがて七ばかりのいが栗頭の男兒の水色の寢衣着たるを連れ出でぬ。此おさなき通辭のお蔭にて、オデッサ通ひは同盟罷工の爲中止中なるも、午後の船にてレニに下り、其れより汽車にて赴き得べしと云ふ事分かりぬ。所謂教へられて淺瀨をわたるもの、子供の名はアレキサンドル保姆は英國婦人なり。日東の貧士酬ふに物なし、中央に孔のあきたるルーマニヤ銀貨二片を其ポッケットに入れ、頭を撫でゝ去る。

ホテル、カプリチーなるものゝホテルこそ怪しき限なりけれ。君士丹丁堡なるロンドン、ホテルの玄關に燕尾服の男三四人椅子にかけ居て客の出入の度毎に直立不動の姿勢をとりて敬禮するは、時としては持參の袷に兵兒帶鳥打

帽かぶりて泥だらけの護膜底ズックの靴はきて出入せし余の甚しく滑稽にも馬鹿らしくも思ひし所なれど、此ホテル、カプリチーの様でも困るなり。便所は所謂下雪隱、甕の上に板二枚を渡せるはまさに日本の田舍農家式にて、室の不潔はさらなり、店先きはまさに下等銘酒屋、四十近き女のけやけき赤紐の飾靴はきたるがあり、人の肩をたゝきて親しげに振舞ふも驚かるゝさまなり。此は困つた、勘定左こそと思ひしに、半日憩いて、パン、茶を喫する二回、サラッド一皿を添へて四法とは法外にもあらざりし。

アレキサンドル來りて、先刻は有り難午後埠頭に行く。ふ、僕の保姆にお逢ひなさいますか、と云ふ。否々、其には及ばず、よき兒よ、達者に成人なさい、と小さき手をとりて打ふり、滊船に乘る。船は露國船、船長も其妻も其士官其の水火夫も皆露人、客も大抵皆露人、日本人が唯一人のつそりと乘り込み來れるを見て、初は怪訝の貌、やがて何となく笑ひぬ。余も何故とはなく笑へり。船はダニューブを下り初めぬ。

露西亞に入る

關所

六月二十六日午後ルマニヤのガラッを出でし滊船はダニユーブ河を下ること約一時間にしてレニに着きぬ。船より上りて初めて露西亞の土を踏む。

河畔の崖を拓きて小税關あり。時節柄長劍長靴の警官數多眼を張りて旅劵荷物の調も嚴重也。余の手荷物はもと

より事無し。同時に上陸したる老婆の頻に怒鳴られ居るは猶太人にて、其更紗蒲團をば關吏五寸越しに抓みて見、をさへて見る。脱税の故のみならで、革命黨の爆裂彈など多く猶太婦人の手にて持込まるゝが故なりと、後に或人の語るを聞きぬ。余の旅劵には君士丹丁堡なる露國領事の裏書あり。其當時領事は余の顔をぢろりと見て、貴下は無論士官ならんと云ひ、否劍にあらず筆なりとの余が答に、腑に落ちぬ顔せしが、野暮は云はずに裏書なし呉れぬ。されば入國に不都合あるべくもあらねど、例の言葉故に問答埒明かず。他の客は皆去りて、滊車の時間

は迫る。弱り果てたる所に、六十近き人足體の男進み出で、兎も角も通辯す。中學生らしき少年五六人問答を聞き居しが、余はトルストイ翁を訪はむ爲に來れりと云ひし時、トルストイの一語に少年等はびちりと體を震はして互に顔見合はせぬ。漸くにして旅券は調濟の判を捺して渡されたり。余の荷物を引かつぎて大踏歩し行く彼通辯氏のあとより停車場にいそぎて、ツーラまでの切符を買ひ、乘換の注意など車掌に賴みくれたる彼漢子に懇に禮云ひて乘込む間もなく瀘車は動き出で、余はこゝにほつと先づは安心の息をつきぬ。

レニは歐露の南西の隅にあり。指して行くトルストイ翁の家は先づ歐露の中心に近きツーラの附近にあり。南露西亞、小露西亞、而して大露西亞と吾は東北をさして行かんとす。

ムウジクの初對面

瀘車はレニを後にしてゆらゆらと走り出でぬ。ゴーゴリツールゲネフ、トルストイ、ゴンチャロフ近くはゴルキーチエホフの小說にて吾知る露西亞に入るは寧故鄉に入

るの感あり。片隅ながら露西亞は露西亞、一歩踏込めば、氣も舒々す。夕日消へ行く車外の風景も早や已に露西亞式なるに、乘りたる瀘車は廣軌の、車室小さき家程ある に、僻陬の支線とて室の片隅に鐵製の大暖爐を据へ置き、ランプ代りに大蠟燭を角燈に立てたるも露西亞の田舍ならでは見られぬものなるべし。

やがて日もたそがれて、ムウジクの輩どや〳〵と乘込みぬ。大なる鎌を携へたるあり。赤き更紗のシャツあり。大抵は素足。徑二尺程の黑パンを出し、小さき偃月刀の如きナイフにてかはる〴〵劈きてはむしや〳〵食ふ。此時長靴の車掌重たげなる袋をやをら持ち來りて開くを見れば胡瓜を賣る也。車内の人々爭ひて買ふ。余も三哥を出して胡瓜五六本貰ひ、ガラツより携へ來りしパンを出して夕食を濟ます。一同は余を見、余は一同を見、語らんとするに言葉は通はず。エルサレムにて非常用に買ひ置きしビスケットの手巾に包みて頗る崩れたるを取出して見參のしるしに振舞ふ。諸君喜びて食ひ、痘痕の一壯年は片手に天を指してしきりに打頷きぬ。

次の停車場にて此一組の下車すると引ちがへに、烈しき酒氣鼻を衝いて一漢子の人を扶けて乘込み來るあり。薄

闇き車燈の光に見れば、扶けられたるは「大野のリア」を思はす六尺を越す雄偉の翁、禿頭襤褸ふるき長靴をはき、蹌踉と腰掛に臀下ろすより早く大山の崩るゝ如く床の上に倒れ臥す。ヂーヅカに大酔せるなり。三十許の連なる男やう〳〵に抱き起せば、餘の人々はマッチを摺りて老大漢の懐より落ち散りたる銅錢を拾ひやる。車掌來りて叱り飛ばし兩人を瀘車より追ひ下ろしぬ。

眼前の事實に、獨りさま〴〵の事思ふ。

三日の行程

二十七日。朝猶太人虐殺のキシネフに近きビンデリーにて瀘車を乘換へ、やがてラズデニエーにて二たびオデッサよりキーフ行の瀘車に乘換ふ。幹線の客車は流石によろづ開けてボギー式の、三等は板ながらゆつくりしたるもの、一方を通路とし、通路と直角に幾區畫を設け、一區畫に相對して二個の腰掛と上に各二段の棚あり、棚は畫たゝみて夜は臥床となす可し。二重窓は露西亞を通じてなり。

停車場毎に小形の鐘をかけ、着車一番、注意二番、三番

の鐘にて瀛笛と共に發車す。大抵の停車場には食堂あり。一隅には聖像飾られ、ニッケル製の大湯沸しは晝夜熱湯を斷だず。乘客は大抵茶器砂糖を用意し居り、停車すれば一哥も投げ出して湯鑵に湯を貰ひ來り、自ら茶を煎じて飲む。余は行きて飲む。紅茶一杯角砂糖二個檸檬一片を添へて十哥。五哥の菓子パン二個もあれば一食に十分也。小さき停車場にて、時々跳足の女兒、櫻桃、野生のラスベリー、瓶詰の牛乳など賣り來る。

二十八日。朝キーフ着。露西亞のエルサレム也。千年の古都、寺院の尖塔簇々として、背は露國第二の大河ドニ

ープルに臨む。くたびれ果てゝ見物せず。停車場に居眠りながら瀛車を待ちて正午キーフを發し、ドニープルの鐵橋を渡りてクールスクに向ふ。川廣々として水上杳かに、心は遠き昔に消へ行く。

露西亞の旅行は大洋の航海の如し。昨日も今日も同じ景色の中を行く。山と云ふものなくて、地は大濤のうねるが如く、五里にして其中に寺の建物しるき藁葺の村あり、二十里にして煙突の町あり。麥は熟して未だ苅られず。草は苅られて處々に香しき堆をなす。間々白樺の林あり。赤松の林あり。大なる軛の農馬車のあとより大なる鎌を

肩にして翁の行くあり。赤しやつの子供等兩手をさゝげ〳〵て瀘車を送るあり。人は國を忘れ、人我の別を忘れて、たゞ大なる自然の懷におさな子とならむとす。

二十九日。朝クールスク着。例の如く停車場に假睡し、正午莫斯科行の瀘車にてツーラに向ふ。

日は出で日は入り、行々又行々。三日の行程一隧道なし。今更に大なるかな露西亞の平野。狂體あり、

武藏野を斗舛で量りばら撒きて

なほあまりある大露西亞の原

氣宇局量はしかあらざれと祈るのみ。斯る地積を有して

猶農民を土地問題に騷がしむるは、社會の組織に餘程の無理あること知る可し。瀘車の窓より見る露西亞は平和なれども、不穩の分子は瀘車の内にもあり。四五人の百姓を引率したる二十八九の眉濃く髯なき小男余の前に座し居りしが、是れ只者にあらずと見る内彼我共に含笑みぬ。彼先づ問ふ、君何者ぞ。余は文人なり、君は。余も筆を執る、君何を書くぞ。余は小説を書く、君は。此時頸さしのべて聞き居しムウジク、彼はアリストクラットなるかと問ひぬ。否、アリストクラットは斯る着物にて斯る車室に乘らず、余は平民也、と半手樣にて答ふる時、

瀘車はとまりて、彼小男は余に目禮しつゝムウジクを連れて下車し去りぬ。

車中雜記

車外の眺は右の如く、車中の仕事は地圖を見る、停車場の名を讀み習ふ、而して車内に入りかはり立かはる諸君と話すべく努力する事也。ポッケットに鈴木氏の日露會話篇あり。覺ふる片はしより使ふ兩手數ふ可き單語を中心として、怪しき英語、拙なき手樣、餘は以心傳心に付す。言葉のかなはざるは、おさな子に復へれるにて、不自由の中に愛嬌あり。

我爲に復讎し呉れつと窃と余を引のけて緊と手を握る猶太人。勇士勇士を愛すと手を握るコッサック。奉天に傷きぬと頷く歸休の兵士あり。樊噲の如く劍を拔きてハムを切る騎兵の吾肩をたゝくあり。日本人瀘車の乘換を聞違へはせぬかと心配し呉るゝ老婆あり。髮を長くし銀の十字架を下げたる正教の僧は日本人此車内にありと聞きて握手に來りしが、トルストイ訪問と聞きて些勝手が違ひし樣に舌砥めずりぬ。夏休にて歸る學生は言葉の通は

ぬをもどかしげなり。女の子の無邪氣に「これ」と示せし絹張の團扇の藝妓の顏刷れる日本ものなりしは口惜しく、膝而下我砲丸の爲に失ひて義脚支杖に扶けられし年まだ若き癈兵の顏見ては消も入りたかりしが、唯一人として些の不快と不安を日東の旅客に感ぜしめたるものはなかりき。

露西亞の官憲は或は余に多小の迷惑を與ふべし、露西亞の民は決して吾を惡まず、と豫期せし事はまさしく中りて、三日の滊車旅行にも、彼我幾十萬の若者共が流し〻血潮の如何に兩國の民と民とを結ぶの膠となり漆となりしかを知るを得て、且は嬉しく、且は有り難く、且は畏ろしくも思ひぬ。

ヤスナヤ、ポリヤナの五日

トルストイ翁訪問

風采は寫眞版にて見飽き、思想は數多き著書にて大要を領す。別に用事はなけれども、唯何となく顔見たくては／＼東より旅し來りし余は、今トルストイ翁の清居を驚かさむとす。

翁の小説「戰爭と平和」を初めて讀みたるは實に十六年前、翁の略傳をものしたるは九年前の事也。當時一書を飛ばして敬慕歎美の意を通せむと思ひしこと一再に止まらざりしも、猶自ら欺き世を欺きて未だ確信の上に立つ能はざりし余は筆鈍りて終に果し得ざりき。今年一月生來初めて新に生るゝの確信を得るや、余は榛名山上より十二文豪の「トルストイ」及び耻かしきものながら名刺かはりの英文不如歸に添へて大要左の意味の書翰を翁に送りぬ。

敬愛する先生。

生は德富健次郎なる者に候。本年三十七年三ヶ月。宗教上の信仰によれば基督教徒、職業によれば頗下

手なる小説家、社會的信條よりすれば社會主義の信徒に候。

生は久しく先生に一書を呈せんとして躊躇致し候ひき。先生の文學的著作は生の嗜讀せし所、先生の文學的天才と眞摯熱誠の心靈は生の歎美し敬慕せし所に候得共、先生の無抵抗主義兼愛主義非文明主義重農主義は生の全くは贊同し得ざる所なりしが故に候。是れ言ふ可くして行ふ可からず、行はゞ社會の破滅と認めしが爲に候。されば日露戰爭の起りし當時も、生は他の社會主義者の非戰論には贊同せずして飽までも露國征討論者の一人にて有之候ひき。先生初貴國諸文豪の筆に紹介せられし露西亞人民は生の愛する所なるも、露國政府の横暴は萬宥す能はずといきまき候ひき。從つて日本の所謂勝利には滿悅し、媾和に關しては露國の俛頭猶未だ足らずと遺憾に思ひし一人に候。

幸なるかな、平和は恢復せられ候。而して平和と共に生の靈的生涯は一大革命を來し候。生は虛僞に立ち淺薄なる自我に立ちたる過去のあさましきを痛感し、而して夢想家の空論視したる先生の所論の今更

に切實なるを痛感致し候。生は向後神に對し人に對し二つなき愛の生涯を送らんと決し候。生は菜食者となり候。生は猶默思し研究し修養せむが爲に氷雪の中なる山の温泉に籠り候。

生は露國の現狀について甚深の同情を有し候。日本もまた新に生るべくもがき居候。世界は多事、而して多望に候。我等後輩の望なる敬愛する先生、願はくは加餐して永く我等の望に副ひ玉はんことを祈上候。

此書往きていくばくもなく余は俄かに翁の顔を見たくなり、飄然西航の途に上り、五月中旬坡西土より大意左の如き第二翰を飛ばしぬ。

親愛なる先生。

生は先生訪問に參り居り候。エルサレム、ナザレ、君士丹丁堡、而してヤスナヤ、ポリヤナ。されば晩くも六月下旬には拜顔の喜を得申す可く候。

生は一通の紹介狀だに持參致さず。生は露西亞語の一句だに話し得ず。使用し得るは片言まじりの英語のみ。しかも生はまさしく大能の手、生を先生に導きつゝあるを確信致候。

此第二の書翰若故障なく達したらんには、翁もまさか寢耳に水にはあらざらん。

冒頭第一の失策

六月三十日、午前〇時三十分と云ふ眞夜中に、余が南より乘り來し滊車はツーラの停車場に着きぬ。

「ドウにかなろぞい」的行きあたりばつたり主義の大ざつぱの罰は覿面、翁の住む家はツーラの次の停車場より下車すると云ふ事は承知し居たれども、南の次か北の次かを

確知せず。クールスク以來人毎に問ひたれども、言葉の故に要領を得ず。まゝよ、ツーラの向ふの停車場ときめて間違はゝ引返す分の事と、ツーラに着くや逸早く飛び下りてプロトポポヴまでの切符を買ひ、またもとの滊車に飛び乘りぬ。滊車はやがてツーラの次の停車場に着き、余は直に下車す。ツーラより浮浪兒四五人潛かに乘込みて腰掛の下にもぐりつゝ車掌をやり過しゝが、余が下車すると同時に彼等も飛び下りつ、笑ひ興じて余の手荷物を引かつぎつゝ驛長の許に從ひ來れり。切符を示して「トルストイ〳〵」と云へば、纔かに意を領したるものゝ如く、

驛長は頭を打ふりて元來し方へ引返へせと云ふ樣なる手振す。此時遲し、南行の瀛車瀛笛を鳴らして來れば、切符買直す間もなく飛び乘りつ。浮浪兒等も余の荷物を肩にして笑ひつゝうち乘りぬ。車掌切符をあらために來て、余の切符を見るより此樣なものが何になるぞと云ふ氣色にて睡げなる腹立聲に「切符、切符」と叫びつ、彼不用切符を劈き棄てぬ。瀛車は再びツーラに着きぬ。車掌が呼びしと見へて一名の巡査入り來り、兎も角も余を促して荷物と共に下車せしめ、偖色々と問へども答ふれども埒明かず。明くるに早き露西亞の夏の夜は二時と云ふに早や白み初めぬ。

ツーラは縣の府にて人口約十八萬、小銃兵器をはじめ、各種製造工業の中心としてやゝ賑やかなる所也。停車場の電燈白む曉に、見物は巡査と余を取まきて山の如くなる折柄、白き輕裙を曳きたる一淑女吾れ通辯しやらむとすゝみ出でゝ佛語をもつて問へども、通せざるを見て、豎子共に語るに足らずと肩を聳やかして去りぬ。發車の時間は迫る、あぐみ果てたる所に、五十ばかりの黑服の淑女來り、英語にて事の由を問ひて、あゝ然るか、君は彼トルストイ伯を彼文豪トルストイを訪問の爲日本より來り玉ひしか、トルストイの家は此次の次

の停車場より下車して五露里馬にて行かれよ、とて巡査に話し呉れ、巡査は手帖を引切りて鉛筆もて何かしたゝめ之を車掌に渡されよと手渡しつゝ、露西亞の赤帽なる白胸掛を呼びて切符を買はせ、余は兎も角も發車間際に南行の瀛車に乗りぬ。黒服の淑女は親切にも再び車内に入り來りて、間違へられな、次の次の停車場也と云ひて去りぬ。やがて瀛車はツーラを出でゝ南に逆戻し、停車場一つ過ぎぬ。車内の人先刻の問答に余の行く方を知りて、車窓より西の方ほの白き曉の野のあなたに一軒の家を指して彼こそトルストイの家と教へぬ。やがてゼキノ

にて下車す。實はツーラの直ぐ次の停車場ザセカは尤も翁の居に近きも、余は黒服の淑女の教へしまゝに其をば乗越して次の次にて下りたるなり。

初對面

半夜の失策に夜は明けはなれて東の森の上には日さへ出でたれども、時計を見ればまだ三時やゝ過ぎたるのみ。あまり早く訪はむは心無きわざ也、しばらく休息と、腰掛の上に横になりたれども、もとより眠られず。ゼキノ

は小さき停車場、一隅には例の聖像を飾り、卓子の上に紫インキの壺とペンを置きたるは郵便局を兼ぬるがためにて、今起き出でし若き男眼を摩りつゝ湯沸に火を入れつゝあり。一人の年老ひたる百姓來りて馬車をすゝめ、

伯トルストイ、伯、伯と云ひて飲込み顔に頷きぬ。邊幅を飾らぬ翁の事にしあれば、客は着飾るにも及ぶまじく、また着飾るべきものもなけれど、せめて此丈はと眞黑に汚れしシャツを白きに更めて、顏を洗ひ、漱ぎ、起ちつ、居つ、ほとりの樺の木の間を歩みつ。漸く五時近くなれば、いでや行かむと馬車に打乘りぬ。馭者は例の眞面目な鈍な顏の老百姓、馬車は太き軛の露西亞式也。

馬車は西北を指して徐に熟せる麥圃の畔を行く。矢車草千鳥草など麥にまじり咲たり。靜かなるかな露西亞の夏の朝。日は早や高けれどもきらめかで睡げに、遠き林には靄迷ひ、野づらは一面白き露の海。何處にか雞鳴きぬ。人は見へず。身は半夢心地に馬車に搖られ行く。麥の穗末に青塗の寺を見つゝ、停車場より一時間ばかりにして一の小村に出づ。此はヤスヤナ、ポリヤナの村也。藁葺、板葺の矮屋兩側に並び、幅濶き中間の道は草生ひたり。犬吠へ、跳足の子供ぼんやりと立ちて見る。馬車は村の

立つ低き丘を下りて、西へ緑青色に塗られし圓錐形の屋根ある番小屋付の門を入る。小屋は空しく、門は常に開放と見へたり。左手にめぐり四丁ばかりの池あり。路は洋杉、菩提樹、白樺など青々と茂れる間を上ること一丁餘、青塗の屋根、白壁二階づくりの家あり。木立に北を塞がせ、三方林を排いて東向きに建てらる。枝も撓に實れる林檎の枝を潜りて、馬車は其の家の西側の入口にとまりぬ。賃を拂ふて馬車をかへし、良久しく佇めども一人の出で來る者なく、家内は寂たり。時計を見れば六時少し過ぎぬ。やゝありて白胸掛せる八字髯の僕らしき男

臺所の方より出で來る。手眞似にて眠り居らるゝやと問へば頷く。余は荷物を玄關に片寄せ置きて、裏の方に出でぬ。夥しき林檎畑、草生ふるまゝにしあれど、樹はよく培はれて何れも枝折るゝ程に實れるを、柱もて支へたり。林檎畑より引返へしてまた先程見たる池の畔に下る。家鴨十數羽水に泳ぎ、池の濤に洗濯する婦人あり。赤松の間を二頭の馬の可笑しき足並して、ヒヨコ〳〵飛びつゝ草食ふをよく見れば、走り去らせじと前足を互にゆるく結びたるなり。池のほとりに腰下ろして、夢見心地に眺めやる程に、門の方より草掻きを肩にし湯鑵を提げて

農婦の來りしが、あと追ふて來し五つ六つの赤しやつ一枚の男の子何やらんセビルを、ふりかへりてつゞけさまに五つ六つ背をくらはすれば、子は大聲あげて啼きわめきつゝ、村の方へ走せ去りぬ。

余はやをら立上りて、家に通ふ道を横ぎり、右手の木立に入りぬ。此處にも周一丁餘の池あり。水草白く花さき、池のほとりに水浴の衣など脱ぐ可く床かきて藁むしろ下げたり。池を周りてやゝ下れる所樺の木の蔭に青塗の狹き板の腰掛あり。余は暫し憩はむと、コルクのヘルメット帽を枕に、インヴァネスうち被りて仰向けになり、うと〳〵と何時しか夢心地になりぬ。

良久しくして人の近寄る氣はひあり。つとめて重き瞼を開けば、一人の老翁吾側に立てり。庭園の掃除に來し百姓爺かと思ひしは一瞬、まがふべくもあらぬ翁の顔に、刎ね起きるより早く「おゝ、君はトキトミ君」と翁は齒ぬけて子供の如く可愛ゆき口もとに笑を崩づして手を差伸べ、余は「あゝ、あなたは先生」と緊と握りし其手は大にして温かなりき。

「君は余の返書を見ざりしならん」

「御返事？御返事は見ずして參り候。坡西土より差上げし

手紙はとゞき候や」

「とゞきたり。送られし書も讀みたり。余は君に返書を出す前に餘程考へたり。許されよ」こゝに翁は余の手をほと〳〵とたゝきつゝ「余は君の手紙を信ずる能はざりし。其はあまりに喜ばしき手紙なりし故なり。故に餘程考へて返書を書きたり。君の手紙に書きし所は眞實なりや」

「無論眞實に候。眞實なるが故に、露骨を許し玉へ、先生の存生中に一度先生に對面せむと推參致しぬ。先生の健康如何」

「甚宜しからず。余の死期は遠からずと覺ふ。皆死を恐る。

然れども死は解脱也、恐るべきにあらず」

翁の顏を見れば、顏の色は紅を帶びたれど、髮髯灰白の色となりて、眼少しうるみ、齒ぬけ、思ふにまして老ひたり。翁は滿七十八なり。我等は今立話したる彼腰掛の邊を去りて、翁は前に立ち、余は從ひて、徑を下り、又一つある小池の邊を話しつゝ行く。白つぽき鼠フランネルのだぶ〳〵したる着物に、黑き革の帶して、緣廣の白き夏帽をかぶり、自然木のステッキをつきたる姿は何處までも畫に見文に讀みたる其まゝの翁也。翁は十年前に翁を訪ひし家兄の消息を問ひ、深井君の近狀を問ひ、而

して談は翁の近業に及びぬ。翁の曰く、余の餘生は長からず、然も一刻存すれば一刻の務あり、余は目下政府と人民の關係につきて著作中なり。已に半稿を終へぬ」と。而して翁は、日本の政況、農と商工の比例を問ひ、「土を耕し他の力に賴らずして生活する者が國の力也」と其持論を出し、日本も田舍の子弟田畑を賣りて學問に都に出で來る者衆しと聞きて、成程と頷き、終に余に向ひて「君は農業によつて生活するを得ざるや」と問ひぬ。余は「農業は最も好む所に候。今は尺寸の土も有たざれども行々は少なくも半農の生活をする心算に候」と答ふ。

池の端より歩を返へして、家の方へ綠陰幽草の逕を上る。バタアカップ、翁菊の類、牡丹色の梅鉢草とも云ふべきもの、白に黃に紅に咲きて草を彩ごる。こゝに今しも大鎌を磨ぎ終れる農爺あり。翁は二言三言交へたるのち、杖を捨て、やをら鎌を取上げて、さくり〳〵と切味を草に試む。余も不器用なる手つきにて二三度振り試みつ。また行く程に、八と六、と當歲の子を保姆の連れて樹下の腰掛に遊べるあり。此は孫也とて、翁はかはる〴〵子供に接吻す。余も其手をとりて今日はと云ふ。翁頷きて曰ふ、モヨー、ポチテニエー、甚好、甚好、と。斯て我

等は、家のほとりの廣場に出でぬ。白き砂地、二三の小さき花壇を設けて、草花美しく夏の日にかゞやく。枝さし覆ふ楓の蔭に白布かけたる長き食卓あり。銀製の湯沸音を立て、茶器、クリーム、パンの皿新着の郵便物などのせあり。こゝに翁は五十ばかりの頭禿げたる革帶の紳士に余を引合はせぬ。此は醫師マコ并スキーとて墺境の人、戰爭中野戰病院に働き、久しく當家にある人なりと。翁は郵便物を彼此と飜したる後、黄色の表紙の小冊子をとりて、君が露西亞語を讀まざるは殘念也、此は面白き書也、百姓ボンダレフの著「勞働」と云ふ書也。ボンダレフの「勞働」は、曾て米國にて飜譯されしを讀みたる事の候、先生の序文ありて露西亞にて絶版されしものに候はん。絶版されたれども、今は刊行自由になりぬと答へつつ、翁は二十歩あなたの林中なる小きはなれを指し、彼處に別室あり何の心配も入らずゆつくり逗留せられよ、と云ひつゝまた握手して午前の日課を果す可く母屋の方に去りぬ。

余はドクトルのすゝむる茶を啜りて話すことしばらく、掃除出來つ、と先刻見たる八字髯の家僕イリア君が案内に、樺の林を排きてたてられたる彼のはなれに入る。四疊程の入口の室に洗面臺あり。次ぎに十疊程の素床の室あり。白木のテーブル、寢臺一、ソファ一、簞笥一、柔らかなるきれ張の椅子三四脚。二つの窓には帷を下ろすべく、窓には常春藤生ひかゝり、窓外には重やかなる林檎の枝垂れて、其下に雜草を拓きて些の花壇を設けたり。特に頻繁なる來客の爲に建られたるものと覺し。十年も住みたき書齋よ、と居心地よきまゝに去るの日惜しかるべしと先づ思ひぬ。

荷物など整理する程に、晝飯の鐘鳴る。くたびれ果てゝ睡むたけれど、努めて彼楓樹の下の食卓に出でゝ集りたる人々に挨拶す。主翁は見へず。夫人は翁と十七ちがひの六十二と云へど五十左右に見ふる體格立派の婦人、あまり飾りなき白リンネルの胸のあたりに藤色の襞とりたるを着られたり。主人に劣らぬ直截の、挨拶も捌けたり。訪問客がうるさくて御困りでせうと云へば、馴れて居ますからと微笑し、御邪魔で無くばしばらく御厄介になりたいもので、と云へば、近い内に嫡子の再婚を致す筈で、

其迄はお搆はしませんが御遠慮なく、との挨拶、日本流の愛嬌は些缺けたらんも眞直に僞らぬは流石に夫人なり。夫人に十三子女ありて現在は八人。席上には三人のみ。第三子レオ君、夫人ドラ子及び其二幼子。レオ君は多少乃父の文才と氣癖を傳へ、夫人は瑞典生れの社交好きなる邪氣は無き婦人。平生聖彼得堡に住して、近來逗留に來り居れるなり。レオ君の妹マリア子は尤も父に同情すと稱せらる、病身の瘠ぎす、英語は家族中での達者、其良人オボレンスキー公爵は髯短く聲も風も柔和にしてスラヴの女性的男子を代表す。未婚の末女アレサンドラ子

は、二十二歳、莫斯科の女學校出の快活なる娘、體量は二十貫と見受けぬ。外には先刻の醫師。翁の秘書にして長女の友なるジュリア嬢、三十餘の此も體格は立派の婦人。ア嬢の學友某。卓邊には四頭の犬侍る。西比利亞產の純白長毛尤も怜悧なる顏せる逸物、茶色のポインタア、黑のセッタア、白黑斑のスパニエル。別に給仕がつくでもなく、葉廣楓を蓋とし、白砂を床とし、勝手に飲食し、勝手に談話し、勝手に去來す。客は今朝來しことを忘れて、あたりの如く快活となりぬ。

午餐後はなれに歸りて、ぐつたりとしたる所に、闥を排して翁突如と入り來りぬ。「あゝ書、君如何なる書を持てるぞ」と余が卓上に取り散らしたる書を彼此とあさりぬ。卓上は聖書、袖珍四書、バイロン詩、山家集、バレスチン案内記等のみ。翁四書をとりて開き、此は何ぞ。孟子に候。孟子、孟子、孟子よりも余は墨子を好む、孟子が孔子の眞意を体得し得ずして、墨子に論爭しかけたるが如きは惜む可し、君水浴を好むか、余は今より水浴に行

かんとす、否池にあらず、近所の川なれど、今同所に堰を設け居れば今日は些遠くまで出かく可し、さらば來られよ」と翁はタオルを腰に卷きて先に立ちぬ。余は手早く長袖の袷に着更へて、翁のあとより歩む。

先刻翁に初對面せる邊より林檎畑に出で、近道也とて荊棘の籬の崩れより潛り出づる翁の早足におくれじと歩みつゝ頭に浮み出づるまゝにさまゞの問答す。ヤスナヤ、ポリヤナの村よりたら〳〵と下る阪の谷となるほとり、遍路とも見ゆる二人の翁旅袋を背負ひ、杖をつき、足を木綿にて卷きつゝとぼ〳〵と來るに會いぬ。翁呼びとめ

てしばらく立話し居りしが、やがて懐より墓口を出して、多少は知らず二人に與へぬ。向の丘へ上る時、余は翁に問いぬ「先生の安部磯雄君への書翰に、社會主義を誤謬に盈ちたるものゝ如く云ひ玉ひしは如何、靈肉の救濟は關聯したる問題也、社會主義は經濟組織に形はるゝ愛の現象には候はずや」。翁は聞咎めて、手紙とな、余は左る手紙を書きし覺なし、先頃も余が書かざる手紙米國の或雜誌にあらはれぬ(蓋翁が物忘れせられしなり)社會主義も發頭時代の人々の言はやゝ傾聽するに足るも、近時のベル一輩に到ては其人殆んど言ふに足らず」と。

丘を上りて、此方近道也とて雜木林の綠深き中に入りぬ。余は後より問ふて曰く、生は一事先生に問ふべき事あり、先生は祈禱せらるゝや。翁聲に應じて曰く、然り、余は毎朝祈禱す、余は『理性、信仰、及祈禱』の一書を著はしぬ、然、余は朝々祈禱す」と。談は轉じて日本刻下の精神的情態に移りぬ。余曰く、今日の日本は精神的に何ものをか求めつゝあり、戰爭は悲む可きも、戰爭は確に人を眞面目ならしめぬ、死生の際は人を眞の己に立返らしめずんば已ず、今度の戰爭にも東郷以下難局に事を成せる諸人の如き、皆所謂基督教徒にあらざるも自然に敬虔

眞面目なる人也」と。ふりかへりたる翁の眼は初めて火の如く閃めきたり、「否、余は然思はず、東郷諸人にして眞に敬虔の人ならんには、其敬虔は狹隘にして事理を辨へざる頭腦を証據立つるのみ」。やゝありて余を顧みて曰く、孔子の言に之れあり、言は愼まずんばある可からず、一言以て智を表し、一言以て愚を表す」と。正しく眞向より大馬鹿者と叱られたるなり。余は當時内心大に翁に服せざりしも、今にして翁の言の切當なるを知る。

話は再轉して露國の現狀に及び、更に「ヅーマ」に及びぬ。翁の曰く、ヅーマは何ものにもあらず、權力を一の手より他の手に渡すも何の用ぞ、要は一切の權力を承認せざるにあり。余曰く、一切の禍の原は金を愛するにあり。翁曰く、金を愛するは即ち力を愛するなりと。

話は又轉じて兵役問題平和問題に移りぬ。余曰く、世界の平和を來すの道は無論海牙の平和會議にあらず、ヅホーボルのとりたる道は最捷徑なり、一人道理に立てば犧牲となるは勿論なるも、犧牲の結果は有効也」と。翁の曰く、然、然れども個人の愛干戈を執るに忍びざるに到らざれば不可也、行きて赤子の首を切れと云ふも何人か忍びん、赤子の愛を推して及ぼすのみ、忍びざる也、犧牲

とは何ものぞ」と。余は忽ちこゝに吾病根に一刀を下されたり。利害を打算し、効果を豫測し、犧牲を計較するは、世の所謂智者の事也。眞理に立つ者、唯眞理なるが故に立つ可き耳。また立たざる能はざる耳。

此時素足の老婆來りて道づれとなり、翁と先になり後になり且語り且歩みしが、やがてぼろ〳〵と涙をこぼし初め、翁はしきりに之を慰めつゝやがて立別れぬ。彼婦人は何人に候にやと問へば、君は余がヤスナヤ、ポリヤナ無月謝學校の記事を讀みたるならん、彼女の良人は其學校の教師にて余が大の親友なりしが先年死しぬ、彼婦人は

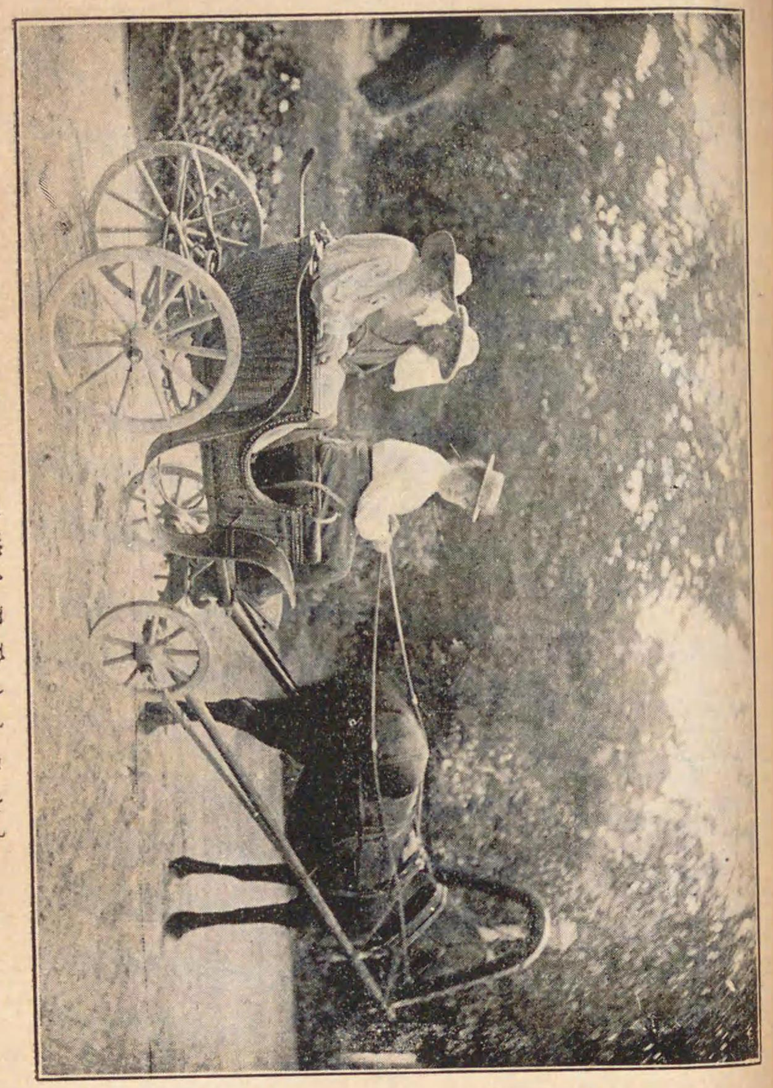
良人を思ひて歎く也と翁は答へぬ。やがて林を出ぬけて、やゝ廣き道に出づ。婦人の馬車をとゞめて待つを見れば、アレキサンドラ嬢の父を載せむとて來れるなり。翁は乘りぬ。余も云はるまゝに乘りぬ。嬢は馭者臺に鞭をふりつゝ巧に馭して行く。翁笑つて曰く、露西亞、日本同乘し、婦人馭たり、見る者物珍らしく思ふ可しと。

程なく馬車は片側林、片側はやゝ打開けたる野川の近くにとまりぬ。翁と余は馬車を下り、黄紫紅白草花咲き乱れたる坡を下り、川のほとりに出づる時、少年二人目禮するを翁は拉して共々に川へ赴むく。川は濶六七間、ゆ

るやかにSの字を畫き、流るゝともなく、水やゝ濁りたり。ほとりに着物脱ぐべき小屋あり。婦人多く腰かけて立つ氣色なければ、翁は他所へ赴くべしとて、余をさしまねきて再び馬車に上りつ。川下の人無き所に行きて、再び川邊に下り、翁は先づ杖もて岸邊の水底をつき試み、やがて翁は眞白き膚を、余は毛だらけの膚を露はしざんぶと水に飛び込みぬ。林の蔭の水は冷たく、もぐりて踏める底は石なり、久し振に拔手を切つて泳ぐことしばらく、翁は如何にと見ればまた緩やかに泳ぎつゝあり。やゝありて上る時、翁喜んで曰く、日本人の泳ぎ方は露西亞人

の泳ぎ方と同樣なり、西歐の者は拔手をきらず、斯くするのみ」と、龜の子泳ぎの態をなしぬ。此川はヴロンカと云ひ、ウバに入り、オカに入り、ヴルガに入ると云ふ。ヴロンカとは惠の意とか。アンナ、カレンナの婦人にヴレンカと云ふがあるは、此よりやとられけんなど思ふ。馬車に上りて莫斯科ツーラ街道の大路を歸途に就く。大路をはさみて林端に赤きは莫斯科人士の別墅也。道普請をなすとて、年老ひたる百姓の路上に座して栗石を割るあり。翁目して曰く、社會主義は斯る者の爲也と。此時人の呼ぶを見れば、レオ君の林端に沿ふて馬を家路に走

らすなり。やがて車上の話は信仰問題に移りぬ。翁の曰く、君が基督教徒たるの義如何。余曰く、生は最廣義最眞義に於ての基督教徒也と自信す、生は人類の最大恩人として三人を數ふ、基督、釋迦、孔子也、而して此内尤も高く昇れるを基督とす、基督によつて神顯はれぬ、基督を信ずるとは基督に顯はれたる神を信ずる也、神を信ずるとは神の聖旨を純粹に行ふ事也、儀文空禮他を排して獨主よ主よと呼ぶ所謂基督教は生の知らざる所也と。翁默聽やゝ久しく、憮然として曰く、基督教徒多く基督を神化す、(神に祭り上ぐ)基督の偶像化は余の好まざる



夫人撮影

ラドンサキレア嬢合及翁イトスルト

所也と。

馬車は正門より入りて母屋の玄關先に到りし時、寫眞機を整へて待ち居し夫人は其まゝ其まゝと呼びとめて、やがてレンズの中に余にとりて永き記念を藏め了んぬ。

一日の夕

晩餐の席は、例に仍て楓樹の下。主翁を初人數盡く揃ひて、イリア君と他に一人の年若き僕と、白手套フロックコートにて給仕す。翁の健啖も近來は著しく減じぬ。菜

食者の爲にスープも肉菜二通りに拵へあり。他には飲料としてクワス、胡瓜のサラダ、全熟の卵、アイスクリーム等あり。菜食者は翁と余のみ。レオ君曰く、余等も久しく菜食なりしが今は肉食となれり。マリア子は曰く、自身は病身の爲に近來肉を食ふ。余曰く、余は菜食をはじめて七ヶ月の新參也。翁の曰く、自分は菜食者たること〻に二十八年也と。

晩餐後は各自に散じ、レオ君は醫師と母屋の直ぐ下なるコオトにてテニスをなす。余は園林を徜徉す。菩提樹や、樺や、槲や、シイダルや、木は茂るに任せ、美しき花咲くも咲かぬも草は生ふに任せたり。家近き一隅に櫻桃、ラスベリーなど多く栽培せる所あり。粗造の温室ありて、熱帶植物少々置き、温床ありて胡瓜蕃茄など狼籍す。やがて日は暮れぬ。茶の鐘鳴りて、母屋の方は笑聲賑やかなり。面白き話もあるべしと思へど、あまりに疲れたれば、室に退き、蠟燭消してヤホナヤ、ボリヤナの初夜の夢に入りぬ。

七月一日。朝起數枚のハンケチと下襦袢を洗濯して、朝日の窓に乾し終り、例の楓下の食卓に出れば、一人の若紳士あり、新聞を閲す。此は昨夜歸り來れるレオ君の弟アンドレー君なり。前頭禿げたれども當年二十九とか。志願兵として日露戰爭に出でたるは君也。從來常に父母の許にあり、母氏を助けて家事を經紀し居る由。君の夫人はチエルトコッフ氏の女にて、子供を連れて今英國にありと云ふ。見す可きものありと誘はるゝまゝに、母屋の二階下なる君の室に入る。壁には古今の銃、獵銃を數多立てかけたり。中には父翁の高加索にありし時、持ち

たるもあり。アンドレー君の示せるは友人某の撮影せる奉天戰のしかも白兵戰の慘憺見るに忍びざる寫眞なりき。君は奉天にありしも、某將軍の從卒なりし故血を流す機會には會はざりしが、戰爭は實に恐るべきものと語りぬ。楓樹の下に歸りて君と語る。余曰く、君は何故に戰爭に出でしや。君の曰く、國家の危急を座視する能はざりしが故也、素より余は父を敬愛す、父は萬國を通じての人也、然れども人各々思ふ所あり、余は露西亞人也、露西亞の爲には血を流さゞるを得ずと。「戰爭と平和」のニコラス、ロスタウはアンドレー君に其型を見出す可し。余は此

單純にして飾らざる愛國者を愛するを禁じ得ざりき。同時に吾膝下より出征する其兒に强壓を加へざりし父翁の心を一たびは測りかね、二たびは成程と頷きぬ。

やがてレオ君と余のはなれに語る。君は乃父の才を傳へしと稱せられて小說、論文、劇などの著作あり。曾て「ノヴエ、ヴレミヤ」に寄稿し、今自家の新聞を起すの計畫あり、且目下の露西亞に關する一篇の喜劇を起草中なりと語りぬ。君曰く、日本の戰を起せしこそ心得ね、日本人も來りて滿州に露西亞人と共々に耕したらばヨキにあらずやと。又曰く、自分ももとは近衛の士官なりき、父の

教を奉じて斷じて劍を棄てたれば、官憲も詮方なく病氣と取つくろいて職を免じ呉れたり。余問ふ、嚴君を如何に見らるゝや。レオ君曰く、父の議論は理想に騁せて實際に適せず、父も今はやさしくなりたれ共昔は極めて主我的の人なりき、父の議論は獨身者にして唱ふべし、妻あり子あり社會の一員たる者は自づから異ならざるを得ず、父は常に說くのみにて何も實行せず、余が妻の父、瑞典に有名なるドクトル某(名を忘れたり)を君も聞知するならん、余が舅の如きは何の吹聽もせざれど續々基督敎徒として現實の善行をなしつゝありと。余曰く、然らば

君は昔は父君に引かれ、今は舅氏に引かれ、斯遠求二心力によりて廻轉し玉ふか。レオ君苦笑して曰く、然、併今は自力にて動くなりと。

草搔き

午餐後主婦とレオ夫人とジユリア孃を除くの外婦人連は皆苅草搔きに出行く。料理番の妻が病後の働の加勢に行くなりとぞ。余も誘はれて行く。マリア子も、アレキサンドラ子も、一人は赤一人は白の頰被りして、草搔きを引かつぎたるさま、正眞の百姓娘也。出で行く時村の小娘二人野生の木苺を摘み來りて玄關先に立てば、夫人出で來り價を拂ふて受取りぬ。不圖其方に見入りし余をマリア子顧みて曰く、彼等は貧しくわれ等は富めるを定めて異樣に思ひ玉ふならんと。

西裏の林檎畑をぬけ、雜木林に入る。下草の蒲公英花さき、オホバコ、また三四種の草花咲けり。林檎畑も林も其向ふの畑も皆トルストイ家のもの、園林、牧場、畑を合はせて六百餘町歩、林檎畑のみにて六十町歩なりとぞ。雜木林の端や、開けたる所、すでに苅られたる草一面に伏し、草地の中程に白樺三四本一叢なして立り。兩婦人

ア|嬢の學友、料理番の妻、其兒等或は草搔き或は手にて苅られし草を裏がへす。共に來しオボレンスキー|公爵は樺の蔭に膝を抱き、レオ|君は馬を飛ばして「甚好、甚好」と笑ひつゝ過ぎぬ。余は一頭アンナ、カレンナの草苅の記事を想起し、一頭物好きに御苦勞な眞似をすると自らの朝りつゝ、汗になりて香しき草を正直に片端より裏かへし行く程に、日影忽薄らぎて遠雷の響すれば、ソレ驟雨來る、速やかに草を積めとて、苅られし程の草を持寄せて奇麗に積み上げ、草搔きの背にたゝきつゝ二つの草堆をつくる。滿身の汗拭ふに間なくほつと息つき立上る顏を吹く涼氣水の如く、ざはめく樺の林の奥闇く、轟く雷を包めるインキ色の雲むら〳〵と林の梢を東に奔りて、飛雨面を撲つ一點二點。病身のマリア子先づ疲れて、料理番の妻兒とア|嬢の外皆去りぬ。余もぐつたりと疲れ果てたれど弱身を見せては叶はじと草引抱へては運び、運びては積み、草堆全く成る頃は夕立も東に逃げぬ。心から嬉しげにグックの妻に禮云はれて吾も嬉しく、これよりそゞろあるきせむと草場につゞける裏の明るき麥圃に出づ。向ふ下りに丘の麥熟して、紫色の飛燕草碧色の矢車草、白き翁菊の一種、緋の姫野芥子など其畔に花さき、

麥圃の彼方はまた波と上れる丘に綠の林茂れり。寄らで過ぎし夕立のあとはれやかに、見る眼は遠く、胷廣やかになる心地す。歩を返へして屋敷の内其處此處とあるき見る。林檎畑の一所は老百姓夜番すと見へたれど、屋敷には墻と云ふ程のものもなく、稀にはりがね一筋ゆるくわたし、十字形の回轉木を設けたる所あれど、要するに家は林に、林は野らにうちつゞきたる開放主義の、雉兎の者も鵠鷺の者も勝手に往來し得べきさまなり。夏と云ふに草深き處にも蛇を見ざるは嬉し。はなれに歸る時、母屋の玄關に物乞ひらしきが二人佇めるに、やがて翁は

出で來りてしばらく立話して昨日の如く懷中より墓口を出し、幾許か與ふるを見ぬ。

露臺の夕

昨日翁は日本皇帝陛下の「仁、國の爲あたなす敵はくたくともいつくしむへきことなわすれそ」と云ふ歌の英譯せられて雜誌に掲げありたるを余に示して、此撞着を如何に調和するやと問ひ、余は陛下の「子等は皆いくさのにはに出て果てゝ翁やひとり山田守るらむ」の歌並に「淺みとりの

とかにかすむ大空の心をおのか心ともかな」の歌を引きていさゝか辯ずる所あり、一場の小せり合ひの後、談は詩歌の事に移りて、日本には右の歌なるもの丶外に發句と云ふ十七文字に幽玄の趣と深甚の想を捉へ得たるものありと放言し、翁は然らば其例を示せ、余は深き思想をあらはせる短詩を君に示さんと云ひぬ。余は退きて翁を驚かす可き和歌俳句を記臆の中より呼び出さんと試みたるも、皆それ〴〵の趣はありながら雄大深刻の想をあらはせる標本として提出す可きものを想起する能はず。背競は見合はして唯おとなしく教を請ふに若かずと思ひ返し、草かきより歸へるとやがて家僕イリヤ君に翁の都合を問へば、やがて此方へと案内せられて母屋の二階に上り、畫像數多かゝれる廣間を通り、翁の書齋を通りて露臺に導かれぬ。此は翁の室夫人の室に沿ふて東向きに差出でたる屋根無しの所謂露臺なり。

露臺の勾欄に徑二寸程の赭き土鉢三個並べられて、翁今これに水そゝぎつゝあり。密柑の芽生への、一個は二々葉可愛ゆく、一個は貝破れの嫩芽弓形にはじけむとし、一個は黑き土の中に種白く膨れたり。翁莞爾と指して曰く、余は之を見るを好む、生命、生命、生命の發展を見

られよと。やがて余が請によりて書齋より一冊の書を取出し來りて露臺の椅子に倚りぬ。書齋の戸目細き金網にて張られたるは、翁が蠅を嫌ふ爲なりとぞ。「アンナカレンナ」のレフインの兄の癖は實は弟の癖なりきと思ふ。翁は青鉛筆を處々に抹せる獨逸文の一冊を披きて、此は十七世紀初半の日耳曼のモンクアンゲリユウス、シレシユス(實名はヰルヘルム、ブールシー)の詩文集にて、中々面白し、聞かれよ、とて其中の四行詩を英譯して誦しはじめぬ。一二度同じ露臺の夕明りに裁縫しつゝある夫人を呼びかけ、云々の英語はと聞かる。夫人は英獨佛の中尤も

獨語に長ずと云ふ。翁の誦するまゝに余は手帖を忘れたれば持參の扇に翁の鉛筆借りて記しといむ。

其隣人に
單に神を見る者は、
其人は是れ
神より來るの光を見る者なり。

＊　＊　＊

神の尤も爾より
聞くことを好みたまふ言葉は、
爾が心の底より

「聖旨のまゝに成したまへ」と云ふ時なり。

＊　＊　＊

俗世に甘く愛しき
或ものを見出す者は、
神にある甘味を
知らざる者なり。

＊　＊　＊

君如何に之を解するや。余曰く、人は二人の主に事ふる能はず、世を愛する者は神を愛せず。翁頷きて又誦す。

余は唯一物を愛す、
余は其何たるを知らず、
余は其何たるを知らざるが故に
故に余は之を擇めるなり。

＊　＊　＊

友よ、卿が座して考ふる時は
卿自ら有德の人なるを感せん、
されど實行しはじむる時は
卿は自己の一小兒たるを發見す。

余曰く、眞なる哉、生常に此歎あり。翁頷きて曰く、然、

然。

神は眞に何ものにもあらず、
然れど神若し何ものにかあらば、
吾れ神を見出す時、
神吾衷にあり。

翁頁を翻へして、「こゝに斯る言を云へり、『吾等はマリヤの如く耶蘇を生まざるべからず』と、面白き言ならずや、吾等は各々基督を生み、到る處に神を見出さゞる可からず。君は昨日三聖を擧げぬ。君は希臘の賢哲を數ふることを忘れたり。」

此時夫人は針を運びつゝ自身はエピクテータスが好き也と云ひ、話は古今哲人に移りて、折しも來合はしたるレオ君はエマルソンを好むと云ひ、話半に五十と三十ばかりの二人の紳士こゝに入り來れり。此は近隣の人にて、翁は主翁象棋の友達也。やがて露臺に象棋盤持出され、客と悠々として勝負を爭ふ。余は少し離れて小聲に夫人と雜談す。夫人の曰く、露西亞の俘虜は一人として日本に於ける取扱の滿足なりしを語らざる者なく、負傷者などは言を極めて看護婦の親切醫員の懇到を感謝し『日本人甚好』と云はざる者なし、人情に隔はあるべからず、

曾て日本俘虜の露西亞にありて露西亞の子供を見て吾子を思ひけむ涙をこぼしけるを、打見たる百姓の婦人泣き出し、日本に俘虜になり居れる此方の者も斯くや彼方の子を見て歎かむと共々に打泣きぬと。話は轉じて露西亞の現狀に及びぬ。夫人の曰く、良人も今は流行後れになりぬ、何處も唯革命、革命と騷ぐ、革命熱は此ヤスナヤ、ポリヤナの村にも入りぬ、自身は何時打こわしの此家に來らずとも保せずと。萬更冗談でもなさゝうな口振なりし。話はまた轉じて家事に及びぬ。夫人曰く、自身は心臟弱し、然れども良人は老ひたり、何事も自身に世話せねばならず、眞に一刻の暇もなしと。突と立つて「此は主の冬季の飲料を作るなり」とラスベリーの乾したるを夕露に濡らさじと取入れ、また覺束なき明に眼鏡かけぬ近視眼の眼に押つくる樣にして裁縫の手を動かしはじむ。無遠慮なる客は曾て聞及びたるアンナ、カレンナのキッチーの結婚と、夫人の結婚の間に事實の一致あるや否やを問ひぬ。卒直なる夫人は答へて曰く、然、君も知り玉ふならん、自身は十七にて良人は三十四なりき、良人は自身の母の友達にて常に遊びに來れり、良人はアンナ、カレンナにある樣に頭文字のみ書きて自身に示しぬ、其は卿